
正義を受け継ぎし者

雅太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義を受け継ぎし者

【Nコード】

N9796M

【作者名】

雅太郎

【あらすじ】

高町家の末っ子”高町なのは”には、大きな夢がある。それは、”大切な人を守ることが出来る正義の味方”になる事である。この夢は、高町家の居候だった青年”衛宮士郎”から、受けついた夢だ。正義の味方を目指す魔術師見習い”高町なのは”は、ある日、”魔法”の力を得る。（このなのはは、運動音痴ではありません。また、Fateの方でも、作者が独自の設定が入っている為、「ありえないだろ、これ………」と、思うところがあるか知れません。そこは、大きな心で見逃して下さい………）

プロローグ1「正義」（前書き）

どうも、雅太郎です。

今回は、なのはを主人公とした物語となっています。

ただ、このなのはには、魔術回路があり（こっちは、あまりなく10本）、魔術師になっています。

ちなみに、プロローグは1 3となっていて、1はこの物語の大きなポイントであるのはが、正義の味方になると決める話になっています。

その為、色々という意味不明になってしまっていますが、お許しください。

………まじで

プロローグ1「正義」

プロローグ1「正義」

「お兄ちゃん・・・お兄ちゃん・・・」

一人の少女が、泣いている。

少女の名は、高町なのは。この高町家の末っ子である。

「ごめんな、なのは・・・」

俺はな、もう治らないんだ。これは、病気なんかじゃないんだ。

これは、俺が昔受けた呪いなんだ・・・」

少女のすぐ傍には、一人の男性が布団の上で寝ていた。

赤色の髪に、白い髪の毛が混ざっている。肌は、少し日焼けしている位に黒くなっている。

この男性の名は、衛宮士郎。高町家に居候している”魔術師”の青年である。

「ごめんね、お兄ちゃん。」

私が・・・私が、もつと治療系の”魔術”ができたら・・・」

なのはは、”If”の世界を夢見た。

もし、自分がもつと魔術ができていたら・・・そんな”If”を・・・

・

「だめなんだよ。この呪いは、決して治らないんだ・・・」

この呪いは、”この世の全ての悪”なんだ・・・」

「えっ!???」

なのはは、”この世の全ての悪”の名を聞き驚いた。

”この世の全ての悪”とは、なのはが、愛読する本”聖杯戦争”に、でてくる聖杯の中身だったからだ・・・

ちなみに、この”聖杯戦争”という本は、昔、士郎が記憶の整理に執筆した文庫本の事だ。

「ねえ、お兄ちゃん・・・嘘、だよね・・・

”この世の全ての悪”なんて・・・」

「いや、本当なんだ。」

俺は、聖杯戦争で”この世の全ての悪”の呪いを受けたんだ。」

「そん、な・・・

う、うわ~~~~ん・・・ひつく・・・お、お兄ちゃん~~~~ん
！！」

なのはは、ついに泣き崩れてしまった。

士郎は、なのはの頭を、撫でてやった。

その様子は、まるで本当の親子のように見える。

「・・・なあ、なのはは、将来何になりたいんだ？」

「ふえ・・・ひつく・・・わ、私は・・・

私は、将来”正義の味方”にになりたい！お兄ちゃんのように、みんなを助けられるような正義の味方に」

「なのは、正義の味方はな、為れないんだ。

みんなを救うことは、できないんだよ・・・」

士郎は、まるで自分に言い聞かせるように言った。

けれど、なのはは、納得しようとしなかった。

「それじゃあ、なのは。約束してくれ・・・

絶対に、自分を最優先にすること。絶対に、諦めないこと。そして・・・

絶対に、大切な人を見捨てないこと、できるか？」

「うん。絶対に・・・守るよ。お兄ちゃん・・・」

「そうか・・・安心した。」

士郎は、笑っていた。

普段は、あまり笑うことが無かった士郎の満面の笑みが、そこにあつた。

「なのは、これが俺ができる最後の応援だ。

具現化開始>>トレース・オン<<」

そう言うと、士郎の胸の辺りが輝き徐々に一つの形になっていく。

それは、黄金の鞘だった。

「お兄ちゃん、これは？」

「なのは、これはな、」^{アヴァロン} 全て遠き理想郷” っていう鞘だ。これを、なのはに渡すよ。」

「アヴァ、ロン・・・」

なのはが、それに触れているとなのはの中に入っっていた。

「あれ、消えちゃった？」

「大丈夫だよ、なのは。」

”^{アヴァロン} 全て遠き理想郷” は、なのはの中にあるよ。

きつと、”^{アヴァロン} 全て遠き理想郷” がなのはの為になっってくれるよ」

「お兄、ちゃん？」

「ごめんね、なのは。」

今は、少し眠いんだ・・・」

「う、うん。それじゃあ、お外に出てるね・・・」

そう言っつて、なのはは、部屋の外に行った。

部屋に残った士郎は、まるですぐ傍に誰かいるかのように、独り言を呟いた。

「親父、ごめんな。俺、正義の味方になれなかつたや・・・でも、いいよな。俺の夢は、なのはが引き継いでくれた。」

きつと、なのはなら俺たちみたいにならない。そして、きつと俺たちが叶えられなかった事を、叶えるよ。

なんか安心してきた。親父も、俺が代わりに正義の味方になるって言っただ時も、この感じだったのか？

親父、俺は、もう頑張らなくても、いいよな？」

そう言っつて、士郎は目を閉じた。

ここに、一人の男の物語が終わった。

ブログ1「正義」(後書き)

どうも、雅太郎です。

まず先に言います。すみません。今回の話は意味不明でしたよね？
しかも、士郎死んじやうし……

ですが、ブログ2と3を見た後に読めば、結構解る気がします。
(まだ書いていませんが……)

という訳で、次回もお願いします。

次回「ブログ2「折れた理想」」

楽しみに！

プロローグ2「折れた理想」（前書き）

遅れてしまつてすみません。

最近、此方の用事がかなり多くてつごうできませんでした…

ちなみに、士郎はF a t e ルート（別名セイバールート）から来ています。

プロローグ2「折れた理想」

プロローグ2「折れた理想」

この平行世界は、異常である。

存在しないはずの魔術師（衛宮士郎）が現れ、彼の魔術と理想を受け継いだ少女（高町なのは）がいる。

それ以前に、この世界に、なぜ”衛宮士郎”がいるのか……………それは、数年前に逆上る……………

* * * * *
* * * * *

side 士郎

あまりの激痛で、目が覚める。

体には、すでに再起不能とまでの傷を受けている。

俺は、今まで正義の味方になろうとあらゆる国へ行き、争いを止めたり、人々を救ってきた。

けど、俺の望む正義の味方には、なれなかった。

多くを救うために、時には誰かを犠牲にしまったことだってある……………

俺は、結局親父やアイツと同じになっただんな……………

啖呵切って、親父に「俺が、なってやるよ」って言ったのに、結局なれなかったんだ……………

「なあ、親父……………」

俺は、親父が望む正義の味方にはなれなかったや…約束したのに、果たせなくてごめんな……

でもさ、後悔も絶望もしてないんだ。正義の味方には、なれなかったけど……

今まで、助けた人たちが笑顔を見してくれて、もう満足できた気がするんだ。

…なあ、親父……俺さ、もう休んでもいいかな？

あの時、救えなかった皆は、俺のこと……許して……くれるかな？」俺は、独り言のように、死んだ親父に向けて語りかけた。

俺の体は、もう持たない。だから、最後までいいは、こんな湿っぽいのもいいだろう……

例え、この傷が無かったとしても、俺の魂には”この世の全ての悪”の呪いが掛かっている。

聖杯戦争の時、言峰との最終決戦に俺は、”この世の全ての悪”を浴びせられた。

”この世の全ての悪”自体は、”全て遠き理想郷”で吹き飛ばしたが、それよりも速く”この世の全ての悪”が、俺の魂に呪いを掛けた為、呪いは既に、俺と一体化してしまっている。

俺は、目を閉じ永遠の眠りにつこうとするが、誰かが近づいてくる気配を感じ目を開く。

俺の目の前には、魔術の師匠である”遠坂凜”が立っていた。

「久しぶりね、士郎。」

「ほんと、久しぶりだな遠坂。」

いつもと変わらない、遠坂を見て少し昔のことを思い出す。聖杯戦争の時、出会ったみんなとの思い出を……

だけど、いつまでも昔を思い出してられない。

彼女が、ここに来たということは、考えられるのはただ一つだ……

「……俺の死体でも、回収しに来たのか？」

「ええ、少なくともそういう設定で来てるわね。」

えっ……

設定て？ってことは、遠坂は、協会や時計塔の連中を騙してまで、ここに来たのか？

そう思っていると、いつのまにか遠坂は、俺の目の前まで来ていた。

「まったく、さっきの独り言聞こえてたわよ。」

こつちが、泣きそうになるくらいの告白だったじゃない……………」

さっきのが、聞こえてしまっていた事実について顔が赤くなるのを感じてしまう。

顔を見られないように、背けようとするが、彼女の手でしっかりと固定されてしまう。

「ほんと……………あんたは、良く頑張ったわよ……………」

「遠、坂？」

「いい、士郎。良く聞いて、

私が、あんたの魂を人形に移すわ。それで、平行世界に送ってあげるわ。」

そこで、しっかりと幸せになりなさい。」

どうやら、それはもう決定事項のようだ。

なら、最後の最後に甘えさせてもらうか。

「ああ、ありがとな遠坂。」

たくさんの宝石と、何処から持ち出したか解らない人形を出している遠坂にお礼を言う。

「別にいいわよ。お礼なんて……………」

その代わり、必ず幸せになるのよ。みんな、それを望んでいるんだから。」

ああ、きっと、幸せになるよ。

「それじゃあね、士郎。大好きだったわ……………」

最後に、遠坂の告白を受けながら、俺の意識は彼方へと消えた。

* * * * *
* * * * *

目を覚ますと、そこは知らない天井だった。

まあ、平行世界に来たのだから、知らないのが当たり前だが、なぜ室内にいるのだろうか？

疑問をよそに、何故か入っていた布団から、起き上がろうとすると、右腕に何か重さを感じる。

確認する為に右腕の方を見てみると、そこには一人の少女が眠っていた……………

（ま、待て！なんだ、この状況は！？平行世界に来ると同時に、俺はもう犯罪者か！！？）

などと、混乱していると、少女が起きたらしい。

「う……………ん、……………ふえ？」

起きると同時に、少女と目が合う。

少女は、こちらを見ているが、俺はどうすればいいか、わからず固まってしまう。

少女は、栗色の髪を片結びに縛っていて、だいたい五歳から六歳くらいに見える。

俺が固まっていると、少女は、立ち上がり扉の方へ向かっていき、

「おとーさん、おとこのひとおきたよ……………」

そう言つて、部屋の外に出て行った。

暫くすると、さっきの少女とおそらく、少女の両親だと思われる男性と女性が入って来た。

「君、体の調子はどうだい？」

「はい、もう大丈夫です。手当てしていただきありがとうございます。」

「別に、たいしたこと無いよ……………」

つと、そう言えば、自己紹介がまだだったね。

僕は、高町士郎。こっちが、妻の高町桃子。それで、この子が僕たちの娘の高町なのはだ。」

「俺は、衛宮士郎って言っています。」

「それで、士郎くん？」

「はい、何ですか？」

「君は、どうやって家に現れたんだい？」

いきなし、家の庭が光ったと思ったら、君が倒れていたからね。」
そう聞き、何処まで話そうか迷ってしまふ。

けれど、なぜかこの人たちには、全てを話したくなる。

ここまで、優しい人たちに嘘は付きたくないから…………

「解りました。全てお話します。」

ただ、その前に、ドアの前にいる人にも入ってきてもらって下さい。」

俺が、そう言っていると桃子さんが扉を開くと、士郎さんに良く似た男性と、めがねを掛けた黒髪の女性が倒れこんでいた。

「恭也！美由紀！」

桃子さんは、驚いているようだが、士郎さんは気づいていたようだ。

「士郎君、息子たちが迷惑を掛けたね。」

こっちは、高町恭也で、こっちが高町美由紀だ。」

「かまいませんよ。」

それじゃあ、お話します。衛宮士郎という男のことを……………」

そして、俺は今まであったことを全て話した。

俺が、魔術師であること。別の世界からきたこと。

あの大火災に、聖杯戦争、そして正義の味方を目指して頑張っていたことを…………

「……………それで、俺は遠坂のおかげで今ここにいます。」

俺が、最後まで言い終わると桃子さんが、俺を抱きしめてきた。

「今まで、辛い思いをしてきたのね、士郎君。」

「ああ、でももう大丈夫だ。僕は、裏の世界について詳しいが、この世界には、協会や魔術師はいないよ。」

いつの間にか、俯いていた顔を起こすと、そこには涙を流しながら、俺を受け入れてくれている家族があった。

「なあ、士郎君？」

君は、この世界で幸せを掴むんだろう？」

「はい、そのつもりです。」

「なら、僕たちと、家族にならないか？」

「えっ？」

突然の言葉に、驚いてしまう。

「あら、士郎さんいい考えね。」

「まあ、父さんならそう言うと思うってたが、俺は賛成だ。」

「私も、賛成だよ。もっと、いろんな話が聞きたいしね。」

「しろうおにいちゃんも、なのはたちといっしょにくらすの……！」

「私たちは、大歓迎だが、どうだい士郎君？」

俺は、この家族たちの優しさに涙が流れてくる。

ここまで、良くしてくれるこの家族に俺は入りたくなる。

だから、俺の答えは……

「これから、よろしくお願いします。」

この家族の、一員として……

みんな、俺はこの世界で、絶対に幸せになってみせるよ……！！

プロローグ2「折れた理想」（後書き）

ほんと、更新が遅れてしまつてすみません。

水木と、キャンプの手伝いに行き、金は疲れて死んでました……さて、今回はどうやって衛宮士郎がなのはの世界に来たのか？ テーマとなっていますが、皆様はちゃんとご理解頂けましたでしょうか？ 次回は、プロローグの最後で「プロローグ3」ありふれた幸せ」です。

最後に、感想をくれた

天狐様、ノース様、端穂様に感謝を

プロローグ3「ありふれた幸せ」（前書き）

今回が、最後のプロローグです。

内容は、簡単に言えば無印・A Sで関係する、士郎が行う行動です。ちなみに、次回の本編から基本なのは主人公です。

プロローグ3「ありふれた幸せ」

プロローグ3「ありふれた幸せ」

士郎が、高町家に来て早2年がたった。

その間に、高町家で一つの事件が起こった。

それは、高町士郎が大怪我をした事だ。

それにより、高町桃子は、立ち上げたばかりの店”翠屋”で忙しく、高町恭也は、力の無い自分に憤慨し無茶な修行をし、高町美由紀は、できるかぎり店の手伝いをしていた。

衛宮士郎はと言うと、高町士郎を大怪我にした原因である組織を壊滅させ、治療系の魔術が使えない自分の才能に悔やんだ……

そして、高町なのはは、家族に手伝いを頼んでも断られ”自分は要らない子”だと、思い込んでしまう。

本来なら、高町なのはは”良い子”を演じるようになるが、この世界では違った。

”もうに二度と誰かが傷つくのは見たくない、だから私はお兄ちゃんのように魔術師になりたい！！”そう思い、衛宮士郎に弟子入りをしたのだった。

始めは、衛宮士郎も断っていたが、結局高町なのはの頑固さに負け、魔術と武術を教えるのだった。

それから数日経ち、高町士郎にやっと回復の兆しがあつた為、高町家には安心が生まれたのだった。

そして、高町士郎は退院すると、同時に裏から抜け翠屋の店長になったのだった。

高町なのはは、その事件以降も魔術と武術を習っていたのだった。

（あの悪夢とも思えた事件から、もう2年も立っただんな……）
俺は、そんな事を考えながら、海鳴市にある桜台という所に向かっていた。

理由は、なのはにそろそろ結界を見破る試験を行う為だ。

試験内容は、桜台の近くに結界を張るのでそこを見つける事だ。

ちなみに、その基点となる所には、ある物を埋めておく。それを見つける事も、試験内容の一つだ。

つと、考え事をしている内に、もう桜台に着いたな。

そこから、茂みの少し奥の所にこれを埋めて、ここにある霊脈から魔力を吸い取るタイプの結界を張ってつと、これでよし！！
さて、それじゃあ戻りますか。

* * * * *
* * * * *

「~~~~~」

「ん？」

桜台から、高町家に帰っている途中、どこからか唸り声が聞こえた。
辺りを見回してみると、車椅子の少女が溝に挟まった車輪取ろうと悪戦苦闘していた。

（元・正義の味方を目指していた俺にとって、この少女を助けられないとな。）

俺は、少女に近づき車椅子を軽く持ち上げて、溝から外した。

「よつと、これで大丈夫だぞ。」

「あ、おおきに……」

「別にいいよ。当然の事をしたまでだし。」

「当然ゆーても、お兄さん以外誰も助けってくれへんかったよ？」

「はは、俺にとっては当然の事なんだよ。それで、何処に行くんだ？」

「えっ？えっと、本屋に行くんです。ちょうど今日、予約してた本が届いたんやけど……」

「俺が、押してくよ。また溝に嵌るといけないし。」

「あ、あれはたまたまや！いつもなら、嵌らへん……！」

そういつて、顔を赤くしながら怒る少女を見て、つい笑ってしまう。この子を、からかっていると、アーチャーの奴が遠坂をからかうのも解るな。

「そや！うちは、八神はやていいいます。お兄さんは？」

「俺は、衛宮士郎っていうんだ。」

「衛宮士郎？あれ、なんか聞いたことあるような……」

そのまま、はやてと談笑しながら歩き、本屋に着くとレジまで連れて行く。

「あの、予約をした八神はやてなんですけど？」

「八神さんですね？予約した本は、こちらでしょうか？」

「ブッ……！」

はやてが、予約したと思われる本を見て思わず吹いてしまう。なんで、その本なんだよ……！！

「あ、はい。そうです。」

「は、はやては、意外と伝記関係の本を、読むんだな……」

「はい！うち、このシリーズの本大好きなんや！！この”聖杯戦争

”は、上・中・下の三冊になってて、今回でやっと完結なんやで……！！」

そう、はやてが予約してた本は、俺が執筆した本だ。

翠屋が、それほど人気が無かつ頃に、なんとか稼いでみんなを楽しませたいと思って、考え付いたのが、俺が巻き込まれた第5次聖杯戦争を、小説化することだった。

本来なら、魔術協会などが許すわけないが、ここは平行世界。士郎さんから、この世界に魔術師がいないことが解ったからこそできた

んだ。

「そついや、この物語に出てくる主人公も作者も”衛宮士郎”やったな？」

あ、なんかやばそうなよかんが……

「士郎さん、なんか関係あるんか？」

「いや、ないぞ！まったく、全然！！」

「……そついや、士郎さんが、バーサーカーを倒した剣つてなやつたかな……？」

「あれは、”勝利すべき黄金の剣”だったな。……って、あ……

……」

「ずいぶん詳しいんやな、士郎さんは？」

なんたる、はやてが笑顔なのになんか、恐ろしい雰囲気なんだが……

「士郎さん、お話、しよか？」

* * * * *
* * * * *

「まったく、ちゃんとやってくれたらすぐ許したんよ？」

「す、すまん、はやて……」

あれから、近くにあつたはやての家に連れて行かれて、何分も問い詰められたよ……

「にしても、まさか憧れの小説家さんにあえるとは、感激や」

まあ、こんなに喜んでくれるならいつか。

つて、そろそろ夕飯の手伝いしなないと行けない時間だ！！

「すまん、はやて。俺、そろそろ帰らないと……」

「え……もう帰ってまうんか……」

そう言われても、時間的に帰らないと……そうだ！！

「はやて、これやるからさ！！」

「なんや、これ？」

俺は、ポケットから”お守り”を取り出す。

「これは、俺が昔友人からもらったイヤリングでな、クーフリーンがつけてたって言う物だ!!」

「えっ、そ、そ、そ、そないや大切なもん貰えへんよ!!」

そう、これは、昔バゼットからもらったものだ。

あの時、バゼットが本来もアイツのマスターと知った時に、バゼットから貰い受けた物だ。

「いいんだ。貰ってくれ」

「う、うん。ありがとう……」

にしても、イヤリングじゃあまだ早いかな……なら!!

「ちよつと待つてろ……これでよし!」

「ほんまにありがとゝ士郎さん」

イヤリングの先端辺りに軽く穴を開け、そこに紐を通してネックレス状にしてはやてに渡した。

「それじゃ、また会おうな」

「うん、またな」

軽く挨拶をしてから、俺は高町家に帰っていった。

それから、いつも通り夕飯の手伝いをし、なのはの修行をし、風呂に入って寝た。

プロローグ3「ありふれた幸せ」（後書き）

今回は、無印とASでとても重要なイベントがある回でした。

もしかしたら、感のいい人は、何があるか分かってしまうかも知れません

それに、常に戦場にいた士郎にとって、ありふれた日常とは幸せな物なのでこんなサブタイトルとなりました

最後に感想をくれた

TOMOKICHI様に感謝を

第一話「高町なのは」（前書き）

プロローグも終わってやっと本編の開始です。
本編は、プロローグ1から約1年後です。

第一話「高町なのは」

第一話「高町なのは」

『誰かこの声が聞こえる誰か……』

薄暗い森の中で、一人の男の子が倒れています。

男の子は、動物に変身しながら、助けを求めています。

私は、助けに行きたい！けど、これは夢。私は、動くことは出来ない……

『お願い……力を貸して……魔法の力を……』

えっ！！ま、魔法！？魔法は、五つしか無いのに！！

そんな疑問も解ける事無く私は、夢から覚めた。

「変な夢……」

それが、私が見た夢の感想でした。

私、高町なのは！小学3年生です！！

私の家に居候してた士郎お兄ちゃんが死んじやってから、もう1年経ちました。

あの時は、私はただ泣くことしかできませんでした……

何日も部屋に籠って泣いていて……

でも！もう大丈夫です！！私は、絶対に士郎お兄ちゃんから受け継いだ理想と力で頑張っていけます！

そんな訳で、今は日課の朝のランニングの途中なんですけど……

頭の中にあるのは、さっきの夢のことです。

あの男の子は、“魔法”って言ってたけど、よくよく考えてみたら、この世界に“魔術”はありませんから、この世界には独自の魔術体系があつて、それがさっき言ってた“魔法”なのかな？

もしそうなら、魔術使いとしてへっぽこだけど、この世界の魔法なら、素質あるかな？

そう考えてるうちに、もう我が家についてしまいました。

「おはよう、お母さん！」

「あら、おはようなのは。今日は早かったわね。」

リビングに行くと、キッチンの方でお母さんが、ご飯を作っていました。

早かったのかな？なら、もう少し距離を伸ばしてみようかな？

あー！にやはは、忘れるとこだった。

「おはよう、士郎お兄ちゃん」

そう言つて、リビングにあるテーブルの上の写真に挨拶します。

士郎お兄ちゃんが、死んじゃってからは、士郎お兄ちゃんを絶対に忘れないように、いつも挨拶をしています。

これが、私のいつもの朝です。

* * * * *
* * * * *

「ねえ、なのは？なのははまだ、正義に味方を目指してるの？」

学校が終わって、塾に向かっている途中に、私の友達の”アリサ・バニングス”ちゃんが、そう聞いてきました。もちろん私の答えは、決まっています。

「うん。そうだよ、アリサちゃん。」

「なんと言つか、ホント男子みたいな夢ね……」

むー失礼な、なのはは女の子だよ。

「でも、素敵な夢だと思うよ、なのはちゃん。」

そう言ってくれたのが、私のもう一人の友達”月村すずか”ちゃんです。

「ま、それは認めるわね。友達や家族を守る正義の味方なんですよ、なのは？」

「うん、そうだよ。」

その後、世間話をしながら歩いてると、アリサちゃんが塾への近道になるという道を歩いてると、何故か見覚えがあるように見えます。そう思いながら、歩いていると、夢に出てきた声がまた聞こえました。

『助けて!!』

その声を聴いた瞬間、私は駆け出しました。

アリサちゃんとすずかちゃんが、驚いているけど、それでも私は走りしました。

その声の主を、探しながら走っていると、一匹の動物さんが倒れているのを見えました。

傷ついた動物さんを見ると、その動物さんが目を覚ましました。私が、動物さんを抱きあげると、ちょうどアリサちゃんたちが来ました。

「ちょっと、なのは。どうしたのよ急に走り出して?」

「あー見て、動物。怪我してるみたい…」

「う、うん。どうしよう?」

「どうしようって……とりあえず病院?」

「獣医さんだよ。」

「えーっと、この近くに獣医さんってあったっけ?」

「えーっと、この辺りだと確か……」

「待って、家に電話してみる。」

* * * * *
* * * * *

「「「ありがとうございます」」」

あれから、私たちは榎原動物病院に行きました。

獣医さんに見てもらったし、もう大丈夫だね?

「先生、これフェレットですよね?どこかのペットなんでしょうか

？」

「フェレット、なのかな？見たこと無い種類だけど…それに、この子が着けてるの宝石かしら？」

先生が、フェレットさんの着いてる宝石に触ろうとすると、フェレットさんが目を覚ましました。

知らない場所だからか、すこし辺りを見回しています。

アリサちゃん、すずかちゃんを見た後なのはの事を見えています。

「見てる……」

なのはが、手を伸ばして触って見るとフェレットさんが私の指を舐めてくれました！

なのはは、つい嬉しくなっていましたか動いたからか、気絶してしまいました。

けど、さっきから、この子から魔力を感じるのは何でだろ？

時間を見ると、そろそろ塾の時間なので院長先生にお礼をいって塾に行きましたが、

ずっと、あの子から魔力がある事について考えてました……

第一話「高町なのは」(後書き)

ついに、本編が始まりました!!

ついついこっちの方が人気なもんでもう一つの話も忘れがちになつてしまっています。

ちなみに、なのはの一人称が変わるのは仕様です。

基本、私で、嬉しい時や楽しい時はなのはになります。

最後に、感想をくれた

普通様、JIN様、ブラスト様、偽善者と書き道化様、天狐様ありがとうございます

天狐様は、二回目の感想ありがとうございます!

第二話「魔法と魔術」（前書き）

投稿が遅れてしまいすみませんでした！！

正直、変なところで切ってしまっただう展開すればいいか、わかりませんでした

それと、今回初の戦闘シーンです！

それと、誤字があっただので訂正しておきました。

第二話「魔法と魔術」

第二話「魔法と魔術」

私は、今日の夕御飯の時に、皆にフェレット君について話しました。普通のフェレット君ならただ飼っていいか？と聞くだけでしたが、あのフェレット君には魔力を感じた事も話しました。

もしかしたら、この世界に私以外にも魔術師がいるかもしれない、またこの世界独自の魔術があるかもしれないという結論が、話し合った結果です。

もし、士郎お兄ちゃんがいたらどう考えるんだろ？そう考えてしまいました……

じゃなくて！とにかく、フェレット君に関しては、家で様子見という事で飼える事になりました。

それを、アリサちゃんとすずかちゃんにメールしてから、私は家にある土蔵に向かいました。

土蔵は、お父さんが士郎お兄ちゃんの為に造ったんです！！

今では、士郎お兄ちゃんの遺品などが置いてありますけど、私はいつもそこで魔術の特訓をしています。

それで、特訓をしようとしたら、急に変な感じに襲われました。

感覚としては、魔術を使う感覚に似ています。

なので、魔術を使う時のように心を澄まし、自分の中にある回路を確認しますが、まったく起動してません、なのでこの感覚の原因は私自身に無いとわかりました。

そうしている内に、昼間の時と同じ声がかしました。

もしかして、あのフェレット君なのかな？

何か切羽詰ってる感じだったけど、何かあったのかな？

そう考えた私は、士郎お兄ちゃんが残したコート状の聖骸布を羽織、

駆け出してきました。

* * * * *

夜道を、身体強化して走り、榎原動物病院に着きました。そうすると、またあの変な感覚になりました。

魔術で、少し慣れてるけど、思わず耳を塞ぎそうになってしまいました。

すると、中から獣の様な呻き声がしました。

中に入ろうとすると、ちょうどフェレット君が窓から飛び出して来ました。

けど、フェレット君を追って、化け物の様な物も飛び出してきました。

おそらく、フェレット君はあれに襲われているのだろうと考え、私に向かって来たフェレット君を受け止めました。

「来て………くれたの？」

「喋った！やっぱり、君って魔術とか関係してるの？」

私が、そのまま質問しようとするけど、あの化け物が起き上がったので、逃げることにしました。

なぜ戦わないのか？だって、ここで戦ったら、榎原動物病院が壊れちゃいそうです……

せめて、広い公園まで逃げるために走ります。

すると、フェレット君が話しかけてきます。

「君には資質がある………お願い、僕に力を貸して！」

「資質？」

魔術のことかな？

「僕はある探し物の為に、ここではない世界から来ました！」

でも、僕一人の力では、思いを遂げられないかも知れない。

だから…迷惑だとは分かっているんですが、資質を持った人に協力

して欲しくて……」

ここではない世界って、もしかして平行世界のことかな……
そう考えると、フェレット君が飛び降りました。

「御礼はします…必ずします！」

僕の力を、あなたに使って欲しいんです。

僕の力……魔法の力を……！」

「えっ！ま、魔法！魔術じゃなくて……！」

「えっ！魔術って、魔法とは違うんですか？」

うん、なんか分かつちゃった……

たぶん、この子のいう魔法って、私のつてる魔法じゃ無いみたい。
そう考えると、あの化け物が襲い掛かってきました。

「うわ~~~~~」

フェレット君は、突然のことで驚いてるみたいです。

私は、左足を軸に、体を90度回転させ、そのままバックステップ
で避けて、

「トレース・オン
投影開始！」

十本ある魔術回路のうち、二本だけ起動させます。

私の両手には、二本の剣が握られます。

剣の名前は、干将・莫耶。中国に伝わる夫婦剣で、士郎お兄ちゃん
が、愛用してた剣です。

本来、投影魔術は一から十まで魔術で再現するけど、再現出来た物
は幻想。

世界の修正され、存在でいて数分しか出来ないらしい。

けど、私や士郎お兄ちゃんは違う！

士郎お兄ちゃんは、何でかわからないけど、

私は、私の魔術の属性のおかげです。

私の属性は、”変換”。士郎お兄ちゃんのような異端の属性です。
名前道理、魔力を何かに変えることに関して働く属性で、私はこの
属性で、投影したものを幻想ではなく、ちゃんとした物として再現
できるので、壊れるか投影破棄しないかぎり、永久的に残すことが

出来ます。

それはさて置き、バッグステップで紙一重でよけた私は、そのまま右手を強化しつつ右手で持った干将で、化け物を切り裂きました。結構硬いと思ってたけど、あっさりと切れたので驚きました。

「あなたは、一体……じゃなくて！」

あの、それはある物が作り出した幻影のような物です。

物理的なダメージでは、回復してしまいます。」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「これを！」

そう言つて、フェレット君は自分の首に掛かった宝石を差し出します。

投影を破棄して手に取ると、なにやら暖かい感じがします。

「それを手に、目を閉じて、心を済ませて、僕の言うとおりに繰り返して……！」

「う、うん！」

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に……」

「風は空に、星は天に……」

「そして、不屈の心は……」

「そして、不屈の心は……」

「「この胸に……！」」

「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ……！」」
『スタンバイ、レディ、セットアップ』

宝石から、光が溢れ空に伸びていきました。

「な、なんて魔力だ………そ、そんなことより！」

落ちていてイメージして！君の魔法を制御する魔法の杖の姿を！
そして、君の身を守る強い衣服の姿を！」

「そ、そんなこと、急に言われても………とりあえずこれ！」

私の周りに、桜色の光が現れ、私を包みます。

「成功だ！」

光が無くなると、私の服が変わってました。

服が、白いワンピース型の服に変わりました。ただ、魔力遮断を持つ聖骸布は残ってます。

手には、柄がピンク色で、先端には金色の装飾にそれに守られるように赤い宝石がついた杖があります。

「え~~~~~！」

いくら、魔術を知っていてももう限界です。

私は、いきなりのことについて叫んでしまいました

それと同時に、さっきの化け物が回復し終わったみたいです。

けど、さっきの様に返り討ちに遭わないように距離をとっています。

「僕らの魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。」

そして、その方式を発動させる為に必要なのは術者の精神エネルギーです。

そしてあれは、忌まわしき力が元に生み出された思念体。

あれを、止める為には封印して元の姿に戻さなきゃいけないんです。

「

「えつと~~~~、わからないんですけど、どうすれば………」

「攻撃や防御などの基本魔法は心に願うだけで発動します。」

けど、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要何です。」

聞いてて、やっぱりこっちの魔術と大きく違うことを実感させられます。

「呪文？」

「そう、心を済ませて。心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ。」

私は、その言葉道理に心を済ませます。

そうすると、一つの言葉が浮かびます

私は、レイジングハートを構えます。

それと、同時に化け物が何かに気づいたのか逃げようとしては、遅いです。

「リリカルマジカル…封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード封印!!」

『シーリングモード、セットアップ』

レイジングハートも先端が変わり、桜色の翼が出てきました。

そして、レイジングハートからでる桜色のリボンが化け物を包みましました。

『スタンバイ、レディ』

「ジュエルシード、シリアル21、封印!」

『シーリング』

更に出る桜色のリボンが、化け物を完全に包みます。
すると、中から化け物の代わり青い宝石が出てきます。

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れてみてください。
ださい。」

「う、うん。」

私は、フェレット君の言う通りにレイジングハートで触れてみると、青い宝石が先端にある赤い宝石のようなところに入っていました。それで終わったのか、私の服装が元に戻り、レイジングハートも元の宝石に戻りました。

「終わったの?」

「はい、ありがとうございます。……あなたのおかげで大きな被害は……」

そう言って、フェレット君は気絶してしまいました。

この日、私はただの落ちこぼれ魔術使いから、”魔導術師”になりました。

第二話「魔法と魔術」（後書き）

今回は、なのはの魔術について色々とでています。

変換の属性は、実はまだ色々使い道がありますが、なのはは気づいてません。

ちなみに、なのはの近接での戦闘能力は、投影ありで美由記さんと互角に戦えます

なのはの投影は、宝具クラスでは干将・莫耶しか投影できず、後は普通の刀剣類や槍、など一般的な武器とカレンの持つ”マグダラの聖骸布”くらいです。

最後に、感想をくれた

アルテリア様、JIN様に感謝を

第三話「協力」（前書き）

せめて一週間に一回は、投稿するつもりです。
後、今回はなのはが協力する様を書くので短めです。

第三話「協力」

第三話「協力」

あれから、私とユーノ君（名前は、帰ってる途中で聞きました）と家に帰り、家族の皆と話し合うことにしました。

「ふむ、それでユーノ君……だったか。」

なのはの話によると、化け物に襲われたんだってね。」

「は、はい。」

それは、ジュエルシードと呼ばれるロストロギアが、作り出した思念体です。」

今は、家族会議中なんです。

「ねえユーノ君？ロストロギアって何？」

お姉ちゃんが、質問すると、皆が頷いてます。

「えっと……実は、この地球という世界以外にも世界があって、それらの世界をまとめて次元世界っていうんですが、その世界内で技術や科学、進化しすぎたらそれが自分達の世界を滅ぼしてしまって、その後に取り残された危険な技術の遺産の事を、ロストロギアっていいいます。」

「一ついいか？」

「あ、はい。何ですか、恭也さん。」

「次元世界というのは、平行世界と違うのか？」

「平行世界？それは、一体なんですか？」

「えっとね、簡単に言うともしかしたらの世界なの。」

例えば、今この場にユーノ君がいなかったり、私たちがいなかったりそれに……死んだ士郎お兄ちゃんがいる、みたいな世界の事なの……」

魔術関連には、私が一番詳しいから、平行世界の説明はなのながしました。

ただ、やっぱり平行世界の事を考えると、士郎お兄ちゃんが生きる世界の事を考えちゃいます……

「そ、そんな世界があるんですか！？？」

「ええ、なのはの魔術だつて並行世界によるものだからね。」

「魔術？」

「この事だよ。」

トレス・オン
”投影開始”」

そう言い、ユーノ君に小太刀を投影して見せました。

「これが、魔術……」

「あははは、ただ、なのははへっぽこだから後は、強化の魔術しか使えないんだ……」

「それで、ユーノ君はこれからどうするんだい？」

話が、脱線してしまつたのをお父さんが戻してくれました。そうです！本題は、これからどうするかです。

「今回の件は、僕がジュエルシードを発掘したのが原因です。」

だから、魔力が回復したら僕一人で探しに行きます……」

「それで、またボロボロになるのかい？」

「お父さん……」

いくらお父さんでも、その発言は酷いです。

「そ、それは……」

「………なのはは、どうするんだい？」

「私は、ユーノ君を手伝いたい！」

このままほつといたら、お父さん達にも被害があるかもしれないから！」

「そう………か、ユーノ君なのはを手伝わせて貰えないかい？」

「「（お）父さん！！？」」「あなた！！？」」

「なのはは、士郎君を見て育つたんだ。」

絶対に折れないくらい分かるだろ？」

そういうと、お母さん達も納得してくれました。

「で、どうだいユーノ君？」

「えっと、本当にいいんですか？」

「うん！」

こうして、ユーノ君は高町家に居候して、私はユーノ君のお手伝いをするようになりました。

第三話「協力」（後書き）

今回は、高町家の家族会議として、
なのはが手伝う事が公認されました。

ちなみに、魔術の存在を知ってるのは、高町家とすずかに忍、ファ
リンにノエル、アリサとなっています。

特に、アリサはある事情であの某シスターが使う赤い布には恐怖
心があります。

それについては、おいおい書くつもりです。

最後に感想をくれた

煌焰様、ノース様、偽善〃人の持ちうる最高の正義様、JIN様、
黒い鳥様

ありがとうございます。

特に、ノース様は二度、JIN様は三度も感想をくださり
誠にありがとうございます！！

第四話「遭遇」（前書き）

今回は、フェイトとの遭遇まで飛びます。

手抜きとか言わないで！！

このなのはは、魔術が元から使える分、魔法慣れして序盤は簡単におわちゃうから！！

第四話「遭遇」

第四話「遭遇」

ジュエルシードを回収し始めてから、数日経ちました。

魔法を使えるようになった次の日には、アリサちゃんとすずかちゃんには何が起きてるかは話してあります。だって、アリサちゃんもすずかちゃんも魔法を知ってるんです。

実は、アリサちゃんが聖杯戦争上巻を読んだとき、何で士郎お兄ちゃんとか、主人公の士郎さんの名前が一緒か問い詰められた時、つい口が滑っちゃったの……その時は、すずかちゃんも一緒にいたから、すずかちゃんも知っちゃったの……それで、二人には魔術的なことで困った時なんかは、相談に乗ってくれてるって言うてくれましたからね。

ジュエルシードも、犬さんに取り付いたのと戦った時は、起動させるパスワード？を忘れちゃって危なかったけど、レイジングハートが、自分から起動して助けたの。

他にも、学校の校庭で出てきたり、男の子が持ってた宝石（投影品）と交換して貰ったりと、わりと頑張ってます！

それに、明日はすずかちゃんのお家のお茶会に誘われてます。明日が、待ち待ち遠しいな……

side out

side ???

私は、今、魔力反応があった海鳴市の桜台というところにいます。
私は、海鳴市には、ロストログアであるジュエルシードを探しに着てます。

この桜台には、なんらかの魔力反応があったから着たけれど、今のところ、ただ魔力が多くあるだけで

ジュエルシードは、一向に見つかりません。

「バルディッシュ！」

『イエッサー』

私のデバイス”バルディッシュ”に、辺りに魔力を流して、強制発動させようとするけど、なんにも変化がありません。やっぱり、ここには無いのか。そう考え、この場所を後にしようすると、真下から大きな魔力反応を感じました。

バルディッシュを、下に向け確認すると、私が今立つてる地面が赤く光で線を描いてました。

あまりの事で、私は呆然としてみると、赤い線が一つの魔方陣を描きました。

そして、魔方陣が大きな光を放ちます。

私は、思わず目を瞑ってしまいました。

光が止み、目を開いてみると、さっきの魔法陣が消えています。その代わりに、私の魔力が半分減ってました。

何が起こったか確認しようと思ったら、いきなり右手に強烈な痛みが起こります。

それと同時に、私の後ろの茂みに何かが落ちた音がします。

私が痛みに耐えながら、後ろを見ると、そこには一人の男性がいました。

side out

side なのは

私は、今すずかちゃんのお茶会に御呼ばれしてます！

このお茶会も、すずかちゃんが私が最近、魔術関連の事で、忙しいからと休憩として、企画してくれました。なので、今は思いっきり楽しみます。

「にしても、まさかなのはが、魔術使いから魔法少女になるなんて、士郎が知ったら、どんな顔をするのか見てみたいわね。」

「そうだね。アリサちゃん。士郎さんの事だから、どんな風に思うか見てみたいかも……」

「うっ……ん……士郎お兄ちゃんは、なんか魔法少女に対して、嫌な思い出がある見たいんだけど」

「どう思うか、知ってみたいかも？」

私たちの会話では、よく士郎お兄ちゃんの話が多いです。

だって、私たちが今ここで、こんなに仲良くしてられるのも士郎お兄ちゃんのおかげだからです。

私たちが、一年生だった頃、アリサちゃんがすずかちゃんの力チューシャを取って、いじめてた事がありました。その時、私がアリサちゃんの頬を叩いちゃって、大喧嘩になった事があります。

その喧嘩を止めてくれたのが士郎お兄ちゃんでした。

私たちが、取っ組み合っている時、士郎お兄ちゃんがちょうど私の忘れたお弁当を届けに来たんです。

その時に、すずかちゃんに止めてもらうように頼まれたそうです。

士郎お兄ちゃんは、懷から投影した”マグダラの聖骸布×2”を、布槍術の要領で飛ばし、私とアリサちゃんを包んだんです。マグダラの聖骸布は、女性には効かないからと、強化の魔術で大幅に強化してあったんです。それから、落ち着かせてたら解放し話し合わせて、また喧嘩し始めたら、聖骸布で赤い芋虫へのループでした。

そのおかげで、私たちは仲良しになれたんですけど、アリサちゃんが聖骸布にトラウマを持ってしまいました……

そんな事を、思い出していると、ジュエルシードが発動した感じがします！

「ごめんね、アリサちゃんすずかちゃん。お仕事、出来ちゃった。」
「行こう！なのは！！」

二人に一言謝って、私は走り出します。
後ろでは、二人が応援してくれてます。

私は、応援を背に、すずかちゃんのお家の森の中へ走っていきます。

side out

「猫、だよね？」

「うん、猫だね」

なのはは、ユーノと共にジュエルシードを確保しようと勢い込んでいったが、そこに待ち構えていたのは、ジュエルシードの力で、巨大化した猫だった。

ユーノは、なのはたちが、話している間に猫たちに食べられそうになっていた為、巨大な猫を見て震えている。

「と、とりあえず、早く封印しちゃうか」

なのはは、そう呟くとレイジングハートをシーリングモードにする。
だが、それよりも早く金色の光が猫に突き刺さった。

放たれた方向を向くと、そこには黒いレオタードとマントを着た金色の髪の少女がいた。

「フォトンランサー、連撃」

少女は、新たな魔法を展開する。

そこから、また複数の魔力弾が猫に当たる。

なのはは、守る為に飛行魔法……フライヤーフィンを発動し、猫の前まで飛び、ワイドエリヤプロテクションを張って防ぐ。

side out

side なのは

「同系統の魔導師……ロストロギアの探索者か。」

木の枝に乗っている女の子が、そう呟きました。

つまり、この子も私と同じ魔法使いだとわかります。

「間違いない！僕と同じ世界の住人。そして、この子も……ジュエルシードの探索者？」

「バルディッシュと同型のインテリションデバイス？」

「バル……ディッシュ？」

あの子の杖の名前なのかな？

でも、同じ探索者でも私は負けない！！

けど、なんであの子はあんなに悲しそうな目をしてるの？

「それは、もらっていきます。」

あの子が、そう言うと、さっきと同じ魔法を連続で撃ってきます。

私は、さっきのようにプロテクションで防ぎます。けど、

「にゃ~~~~~！」

突然猫さんが、鳴きそちらに注意が行ってしまいます。

あの子は、それを好気に思ったのか、一気に接近してきて、鎌の状態にした杖で切り裂こうとしてきます。けど！

「トレス・オン 投影開始！」

私は、一本だけ魔術回路を使い干将だけを投影します。

レイジングハートを左手で持ち、干将を右手で持ちます。

そして、あの子の鎌状の杖を干将で弾きます。

「なっ！！！」

さすがに、隙を突いたのに弾かれるとは、思ってたようです。でも、これが私の戦い方！土郎お兄ちゃんのように”わざと”隙をうまく作れないけど、カウンターならできます。

あの子が、驚いている間に干将を突きつければ私の勝ちです！

そして、私は――

――全力で、地面まで飛びました。

さっきまで、いたところを見ると、そこには3本の矢が通り抜けてました。

直感で、動かなかつたら危なかった！

私が、矢を放った人物を見ると、私は驚きのあまり動けません。だって！

「ふむ、殺気を殺しきれなかった私の未熟か、それとも彼女の探知能力が上だったか……」

まあいい、フエイト！戦場で、驚き、動きを止めるなど、早死にするぞ！」

「ご、ごめん。”アーチャー”助かったよ。」

だって、そこにいたのは、遠坂 凜さんのサーヴァントだった、最後まで真名が解らなかったアーチャーさんが、いたからです。

第四話「遭遇」（後書き）

ついに、サーヴァント登場！

最初のサーヴァントは、アーチャーです！

【クラス】アーチャー

【マスター】フェイト？

【真名】？？？

【宝具】？？？

今のところ、なのはが得た情報はこれ位です。情報を得たり、サーヴァントが出るたびに、この紹介を書いていきます！

最後に感想をくれた

TOMOKICHI様、JIN様ありがとうございます！

TOMOKICHI様は、2回目の感想ありがとうございます！

JIN様は、いつも感想ありがとうございます！！

第五話「正義の味方（見習い）VS 錬鉄の騎士」（前書き）

お久しぶりです！

ついに、なのは対アーチャーです！！

なのはは、どこまでアーチャーと戦えるでしょうか！？

第五話「正義の味方（見習い）VS錬鉄の騎士」

第五話「正義の味方（見習い）VS錬鉄の騎士」

私は、未だに呆然としています。

「フェイト！ここは、私が彼女の足止めをする！

今のうちに、ジュエルシールドを封印してこい！！」

「うん！アーチャー、気を付けてね！！」

なんで、この世界にサーヴァントが居るの！！

この世界に、聖杯は無いはずだよ！！

でも、現にここにアーチャーさんが居る。

なら、私はアーチャーさんを倒すしかない！

「さて、フェイトも向こうに行ったな……」

君、なぜ”魔術が無い”世界で、魔術を使っている？」

「”第二魔法”、と言えば、解りますか？」

「……成程、どこかの馬鹿な魔術師が、君に教えたのか。

さて、私の役目は、君の足止めだ。全力でこい！さすれば、この身に、届くかも知れんぞ？」

「ま、待つてください！

貴方たちは、なぜジュエルシールドを集めてるんですか！？

あれは、危険な物なんです！」

アーチャーさんのお話も一通りも終わると、ユーノ君がアーチャーさん達の目的を聞きます。

でも……

「ふむ、ここにも、まだ喋れる動物……いや、こいつは使い魔か？
使い魔は、ほとんどが喋れるみたいだな。」

「ユーノ君は、使い魔じゃありません！

私の友達です！！！」

そう言い放って、私はレイジングハートをユーノ君に向かって投げます。

「なのは！？」

『マスター！？』

「ごめんね、レイジングハート……」

アーチャーさんは、私たちより……ううん、この中で一番強い！

なら、1%でも勝てるように私が一番慣れてる戦い方じゃないと！！

”^{トレスオン}投影開始”！！」

私は、そう言っただけで空いた左手に莫耶を投影して、アーチャーさんに向かって走り出します。

「やはり、投影魔術か……」

それに、私のようなサーヴァントについても、知ってるようだな。」

そう言っただけで、アーチャーさんは、持っていた黒い弓を消して、私と同じ、夫婦剣・干将莫耶を出してきました。

（アーチャーさんは、やっぱり干将莫耶を使ってた英雄なのかな？

それとも、私や士郎お兄ちゃんと同じなのかな？）

考えながらも、私は干将莫耶で切り下ろす様に、振ります。

アーチャーさんは、逆に切り上げる様に、振るのが見えました。

そして、二つの干将莫耶が、ぶつかり合った瞬間……

「はあ！」

「！！？」

……私の投影した、干将莫耶だけが、砕け散りました。

え、な、なんで……？

「どうやら、骨子が安定していないな。」

それではまだ、子供だましの域だよ……」

今度は、左手で持っている莫耶のみを振るのが見えます。

私は、急いでまた干将莫耶を投影し、二つを盾のように持ちます。

「ぶっ！！」

「くっ！！！」

ぶつかり合うと、私は吹き飛ばされました。

しかも、干将莫耶には、大きな輝が入っています。

（力の差が、違いすぎる！！）

輝のつた、干将莫耶の投影を破棄し、今度は、飛び道具のクナイを親指以外の指に挟むように六本投影します。

「これなら！」

新たに投影したクナイをアーチャーさんに投げつけます。

でも、予想通り簡単に弾かれたり、避けられます。でも、骨子を安定させるくらいの時間は稼げた！

トレースオン
「投影開始」！

骨子をさつきよりも安定させた、干将莫耶をアーチャーさんに向かって投げます。が、簡単に弾かれてしまいます。でも、

トレースオン
「もう一回！」投影開始」！！

さらに、投影した干将莫耶をもう一度、投げますが、また弾かれます。

でも、これで準備は整った！

「！成程、狙いは”鶴翼三連”か。」

”鶴翼三連”は、土郎お兄ちゃんが考えたオリジナル何でアーチャーさんが知ってるの！？

それに、私の狙いは”鶴翼三連”じゃないの！！

「はああああああ！！」

私は、足を全力で強化して、全速力で走ります。その途中で、また干将莫耶を投影します。

「甘い！」

アーチャーさんが、切り下ろす様に振った干将莫耶を、私の干将莫耶で防ぐように振ります。

そして、二本がぶつかり合う直前に、私は……

トレースアウト
「投影破棄！！」

「なっ！！！！！」

持つてる投影を破棄して消します。

普通なら、このまま行けばアーチャーさんの干将莫耶が、そのまま私を切り裂きます。

そう、”普通”なら。

私は、体を地面すれすれまで低くして、アーチャーさんの真横を通り抜け、後ろに回ります。

私の強化した足なら、ほんの一瞬さえあれば、通り抜けることが可能です。

……もつとも、魔力の大半を失うけど。

私は、驚きできた隙を逃す前に、最後の魔力を振り絞って新たに干将莫耶を投影します。

「くっ……………なに!？」

アーチャーさんが、こちらに振り向き反撃しようとしていますけど、それも私の計算のうちです!

アーチャーさんが、反撃しようとしても、私がさっき投げ、弾かせた二対の干将莫耶が、アーチャーさんの反撃の邪魔をします。その間に、両腕を、最大まで強化します。

これが、私のオリジナルの技!

「”鶴翼四連”!!!!!!」

私は、アーチャーさんに向かって、干将莫耶を振りぬき、吹き飛ばします。

私は、魔術回路での魔力が尽きてしまい、その場に膝をついてしまいます。

「なのは!」

『マスター!!』

ユーノ君が、宝石に戻ったレイジングハートを持って（啜えて?）こっちに走ってきます。

でも、まだアーチャーさんは、倒せてない!!

「やれやれ、まさかあんな使い方をするとは思わなかったな。」

さっきの、攻撃じゃダメージも負わせられなかったなんて……

「だが、忘れてないか？」

私の役目は、足止めだ。いくら、私を倒そうと奮闘しても、本来の目的を果たさなければ意味が無いぞ？」

！！！！

アーチャーさんが、現れたせいで、本来の目的を忘れてました。

そうだ、いくらアーチャーさんと戦っても、ジュエルシードを封印しなきゃ意味が無いんだ！

「ごめん、アーチャー。少し、遅くなった。」

「いや、構わんよフェイト。こちらも、どうやら向こうが魔力切れのようだ。」

では、ここに居る意味はもう無いな。

行くか、フェイト？」

「うん。」

私は、魔力切れのせいで、喋る事もできず、ただアーチャーさんとそのマスターのフェイトちゃんを見ている事しかできませんでした

……

第五話「正義の味方（見習い）VS 錬鉄の騎士」（後書き）

今回は、なのはの惨敗でおわかりました。

なのはが使った、オリジナルの技鶴翼四連の説明をします。

鶴翼四連

なのはが、鶴翼三連を応用して作り上げた技。

あらかじめ、二対の干将莫耶を投げてから、攻撃に転じるところまでは、鶴翼三連と同じである。だが、鶴翼三連と違い、三対の同時攻撃ではなく、時間差の攻撃である。また、三対目の干将莫耶を、わざと消すのは、相手に隙を作らせる為であり、所見で見切る事は難しい。また、高速の移動が出来無ければ、相手の反撃を受けてしまう為、危険な技でもある。最後の四対目の攻撃では、なのは自身を相手にすれば、二対の干将莫耶が、二対の干将莫耶を相手にすれば、なのはがと防ぐ事も難しい。弱点とすれば、フェイトのようなスピード型に、回避される事である。

では、最後に感想をくれた

雨季様、池上竜馬様、碧河悟空様

ありがとうございます！

裏第四話「アーチャー召喚」(前書き)

今回は、第四話「遭遇」の裏話

アーチャーが召喚された、後の話です。

裏第四話「アーチャー召喚」

裏第四話「アーチャー召喚」

「答えは得た、大丈夫だよ遠坂」

俺は、精一杯の笑顔を、目の前に居る少女に向ける。

今回の聖杯戦争で、俺のマスターであり、裏切り者の俺に、再契約を望んだ優しい少女に……

「決して間違いなんかじゃない……」

俺は、この聖杯戦争で……まさか、殺そうとしていた、自分から答えを得られるなんて、思いもしなかった。

でも、俺は答えを得たんだ。なら、もう一度、理想に燃えるのもいいかも知れない。

この身は、折れた剣……折れているのなら、また使えるように、作り直せばいい！

だから、もう一度頑張っていける！

「俺もこれから、頑張っていくから」

そういい、俺の体は足から消えていった。

少しずつ消えていき、もう下半身がなくなった状態になると、遠坂が俺に何かを投げてくる。

俺は、反射的にその何かを取った。

それは、依然遠坂に返したはずの遠坂の父、時臣の形見の宝石だった。

「お、おい遠坂!？」

「餞別よ!ちゃんと持って行きなさい!」

その言葉に、自然と笑みが浮かぶ。

ああ、ならありがたく頂いていくよ――
既に、声が出ない状態だったが、それでもそう言った。
そして、俺は座に戻っていった。

* * * * *
* * * * *

座に戻ると、外で感じた事・考えた事が、記憶になってしまふ。

俺も、今感じてるこの気持ちも、記憶になってしまふのだろうか？

俺は、右手に握っている、宝石を見る

例え記憶になつても、何度でも考えて抗ってやろう。

そう決意しながら、俺は座に着くのを待っていたが、別の方向に引っ張られる感じがする。

（まさか、座に着く前に、召喚されるとはな……）

座に着かなくても、召喚される事はある。

だが、それも今まで召喚された中で、そう多くは無い。

けれど、このまま召喚されたら、今の気持ちを残してられる。

（例え、”守護者”として、召喚されようが、全てを救ってみせる！）

俺は、決意を新たに召喚された。

そして、出た場所は、森の上だった……

（俺は、世界にでも嫌われているのか？

まさか、連続で上空に召喚されるとは……）

そう考えていると、頭の中に情報が流れる。

（……！魔術師がいなく、聖杯が無いだと、という事は、平行世界なのか……！）

だが、クラスとクラススキルがあるとは、どんな召喚だ！？）

そう考えている内に、俺は、森へと落ちていった。

幸いにも、茂みに落ちる事ができ、地面に落ちるほどの、痛みは無かった。

そのままの体勢で、前を向くと、一人の少女が、右手を押さえながら立っていた。

「やれやれ、まさか二度もこのような召喚をされるとはな。」

まずは、このマスターについて知らなければな。

この子が、言峰のような考えの持ち主なら、協力したくは無いしな

……

少女は、黒い杖？をこちらに向けて来た。

「あ、あなたは、何者ですか？」

さすがに、いきなりこのような男が現れたら警戒するだろうな。

私は、さっきのように”アーチャー”としての話し方を続ける。

「ふむ、何者とは、私を召喚しておいて随分な言いようだな、マスター？」

「私が、召喚？」

「そうだ、私は君に召喚されてこの場に居る。」

少女は、私が敵が目の前に居るかもしれないのにも関わらず、何か考え事をしてるように見える。

「わ、私は召喚魔法とかは、使えません。」

出鱈目を言わないでください！！」

「別に、嘘ではない。」

私が、現れる前に何処か痛みは無かったかね？」

少女は、「あ！！」と言い、自分の右手を見た。そこには、赤い三つの模様があった。

「それは、令呪といって、私のような、マスターのサーヴァントを持つてる証であり、

絶対命令権でもある。」

「令呪？サーヴァント？」

「質問は後にしたまえ、いまは休む方が先だ。」

マスターも私を召喚して、大分魔力を消費してるだろ？」

そう言い、私はマスターを抱え、太い木の枝を足場に跳ぶ。

「あ、あの！お、降ろしてください！！？」

「私が走った方が、早い。それと、出来るだけ、口を開くのは止めた方がいいぞ、マスター？」

舌を噛むことになる。後、自分の家の方を指差したまえ。」

私が、マスターの意見を封殺し、そのまま走る。

マスターも観念したみたいで、素直に従ってくいている。

さて、ここからどうなる事やら？

* * * * *
* * * * *

さて、なんだろかこの状況？

マスターは、おろおろとしており、マスターの姉？らしき人物には、謎の魔術で、拘束されてしまい、

私は、その謎の魔術に拘束され床に倒されている。

(…………… なんです)

ついつい昔の口癖を言ってしまう。

「アンタは、一体フェイトの何なのさ!!」

「あ、アルフ？一応、話位は聞いてあげよ？」

「フェイト、一体こいつは何なのさ!？」

「…………… なあ、話を聞いてくれないかね？」

と、言うわけで、フェイト？と呼ばれたマスターと、アルフ？と呼ばれたマスターの姉？の向かい側に、私は拘束されたまま座る。

「で、結局アンタは、フェイトのなんなのさ!!」

「私は、フェイト？のサーヴァントだが……………」

「あ、あのサーヴァントってなに？」

「簡単に言えば、使い魔の様なものだよ「フェイトには、あたしつて言う使い魔が居る!! あんたなんか、要らないよ!!!」…………… サ

ーヴァントは、君のような存在とは違う。サーヴァントは、過去・未来に偉業をこなしたりした、英雄のような存在だ。」

「英雄……………」

やはり、このような話はあまり信じられないようだ。だが、一応本
当の事だな。

「じゃあ、なんでアンタが居るのさ！！過去や未来に居る奴が、今
いるわけないだろ！！！」

「！！だから、さっき召喚って、言ったんですか！？」

「ああ、私たち、サーヴァントは”座”と呼ばれる時間軸から、外
れた場所に居る。

だから、召喚する際に、過去や未来に召喚されることができる。」

「だ〜か〜ら〜！！私が、居るから、アンタなんか必要ないんだよ
！！」

さつさと、座とか言うところに戻りな！！！！」

<以下、ずっとアルフが否定し、フェイトがアーチャーに興味を持
ち、アーチャーはずっと頭をかかえながら、アルフの説得をしてい
た。>

「あ、アルフ一応この人は、私の使い魔だから、一緒に行動するつ
てことでいいよね？」

「うつつう、フェイトが言うなら仕方ない……でも！あたしは、認
めてないからね！！！」

まったく、いつまでもイタチゴッコだな……

「さて、私はまだ、君達の名前を聞いてないんだが……」

一応、名前の交換も契約に必要だからな。

「あ、そういえば、そうでしたね。

私は、フェイト・テストロッサです。」

「……アルフだよ」

「私は、アーチャーと呼びたまえ。

そして、フェイト」

「は、はい！」

まだ、硬いな……まだ、仕方が無いか。

だが、今はそれよりも言わなければならないことがある。

「合格だ!!」

「えっ?」「はあ!?!」

「フエイトは、俺のマスターとしてふさわしい者だと、判断したよ。さつきまでの、口調に関してはすまなかったな。」

これが、俺の出した結論だ。

フエイトは、俺のマスターとしてふさわしい。

だからこそ、彼女達を絶対に守る!!

それが、俺の出した答えでもある。

「さ、子供は、もう寝る時間だ。」

俺の召喚で、魔力をかなり消費してるだろ?」

「う、うん。」

「あんたに、言われなくてもそのつもりだよ!!!!」

俺は、フエイトとアルフを寝室へと、送って行った。

だが、まだアルフには嫌われてるようだな……

俺は、苦笑しながらそれを見送った。

そして、一人になった俺は、誰も居ないはずのリビングを目に向けてる。

「そこに居る者、出てきたまえ。」

俺しか居ないはずのリビングに声が響く。

それと同時に、目の前が、歪んでいき一人の少女（幼女?）が半透明で、出てくる。

『まさか、見つかるとは思わなかったよ~~~~』

そこに出てきたのは、まるでフエイトがそのまま小さくなって、5、6歳くらいまで小さくなった感じだ。

だが、見たところ、害意はありそうも無さそうだ。

「君は?」

『私は、アリシア・テストロッサ!フエイトのお姉ちゃんです。えっへん!』

そう言って、胸を張るアリシアは、見た感じ通り子供のように見え

る。

『アーチャー、だったよね？私のお願いを聞いてもらえるかな？』

「内容によるな。」

そして、私はアリシアと色々と話し合った。

裏第四話「アーチャー召喚」(後書き)

今回は、第四話の裏話でいした！

そして、幽霊アリシア登場！！

できたら、アリシアの蘇生を試みたいですよ！！
最後に感想をくださった

雨季様、

ありがとうございます！！

第六話「召喚」(前書き)

ついに、なのはがサーヴァントを召喚!!

第六話「召喚」

第六話「召喚」

アーチャーさんと、フェイトちゃんが、この場所から帰ってからすぐに、私は足に力を入れ立ち上がりました。

私は、一つの決意と共にアリサちゃんとすずかちゃんのところに向かい歩き出します。

「なのは、大丈夫？」

「大丈夫だよ、ユーノ君……ちよつと、魔術用の魔力が切れただけ」
『すみません、マスター……私が、もっとマスター向きの杖でしたら……』

「いいよ、レイジングハート。今回は、私も冷静にいらなかったし……」

それに、私は魔術の修行が主だったから、魔導師としては弱いから……

だから、帰ったら修行しよ！！」

『はい、マスター！』

私たちは、お互いを励ましながら、皆のところに帰っていきました。

「ちよ、ちよつとなのは、どうしたのよ！？」

そんなにふらふらで……！」

「なのはちゃん、大丈夫？？」

戻ると、案の定二人に心配されたいました……

「えつと、すずかさん、アリサさん。なのはは、大丈夫です。ただ、魔力切れなだけです。」

私の代わりに、ユーノ君が代弁してくれました。

つて、え！？？なんで、二人とも固まってるの！？

「ユーノ、あんた喋れたの！！」

「な、なのはちゃんの使い魔のユーノ君つて、喋れたんだ……」

あー！そう言えば、二人にはユーノ君が喋れる事言ってなかったんだっけ……

「あ、あの僕は使い魔じゃなくて人間です！

今は、魔力が少なくなってるから、燃費がいい動物の姿になってるだけです！！」

あ、なんとなくだったけど、やっぱり人だったんだ……

「あ、すずかちゃん、恭也お兄ちゃん呼んできてくれないかな？」

「……あ、う、うん。いいよ。」

そういつて、すずかちゃんは走ってドアへと向かいましたけど、ドアが開きました。

「その必要は無いぞ。」

「なのはちゃん、大丈夫だった？」

入ってきたのは、恭也お兄ちゃんと、すずかちゃんのお姉さんで、恭也お兄ちゃんの恋人の忍さんでした。

「それで！なのは、一体何があつたのよ？」

「うん、今から話すね。」

私は、皆にさつき合つた事を話しました。

もう一人の魔法少女・フェイトちゃんと会つたこと、そしてアーチヤーさんが現れた事……

「まさか、サーヴァントが、この世界に来るとは……」

話し終えると、皆暗い顔をしています。

だって、サーヴァントがいるって事は、聖杯戦争が起こる可能性があるからです。

「ねえ、恭也お兄ちゃん。」

「……どうした、なのは？」

「今日は、土蔵に近づかないで貰えないかな？」

「どうしてだ？」

私は、さっき決意した事をいいます。

「そこで、サーヴァントを召喚するの」

* * * * *
* * * * *

夜の十時ごろ、私は土蔵で、一つの魔方陣を描きます。

サーヴァントの召喚については、恭也お兄ちゃんとお父さんに反対されましたが、お母さんの”お話”で納得してくれました。……そういえば、よく土郎お兄ちゃんも、よく人助けをしてて危ない事に巻き込まれそうになってたから、お母さんに”お話”されてたな！

そんな訳で、今土蔵の中にいるのは、私だけです。

皆は、土蔵の外で待っててくれています。

魔方陣も描き終わり、後は呼び出すだけです。

私は、目を瞑り詠唱を始めます。

「素に銀と鉄

礎に石と 契約の大公

祖には我が師 衛宮士郎

振り立つ風には壁を

四方の門は閉じ 王冠より出で

王国に至る三叉路は 循環せよ

閉じよ 閉じよ 閉じよ 閉じよ 閉じよ

繰り返すつど五度 ただ満たされる時は破却する

- - - - Anfang

詠唱をするごとに、描いた魔法陣が光浮かび上がっていく。

私は、それを気にせず詠唱を続ける。

「告げる

汝の身は我が下に　我が運命は汝の剣に
聖杯の寄るべに従い　この意この理に従うなら応えよ
誓いを此処に　我は常世総ての善となる者

我は常世総ての悪を敷く者

汝三大主　言霊を纏う者」

召喚の為に大量の魔力と、集中力を使い既に立ってるのだけがやつとです。

それでも、最後の言葉を紡ぎます。

「抑止の輪より来たれ　天秤の守り手よ！！」

私が、最後の言葉を紡ぐと、大きな風が吹きました。

その風を受けながら、私はただ目の前に居る人物しか見れませんでした。

金色の髪をなびかせ、青い服には、銀色の鎧を着けている。

「問おう……貴方が、私のマスターか？」

この光景を、私は忘れないだろう。

「サーヴァント、セイバーことアルトリア・ペンドラゴン、召喚に応じ参上した。」

とても、凜としていて……

「例え、この世界に聖杯と言う壊れた願望機が無くても、」

とても、綺麗で……

「我が剣が、汝の道を切り開こう。ここに、契約は完了した」
そんなサーヴァントのセイバーさんを私は、召喚していた。

第六話「召喚」（後書き）

今回は、なのはのサーヴァント召喚です。

たぶん、皆さんの予想道理のサーヴァントを召喚したと思います。

このセイバーは、アーチャーと同じく、凜ルーツからきています。

そのため、既に聖杯になど興味は無く、今まで騎士として過ごしてきた分、女の子としての平穏を求めて召喚に応じています。

最後に、感想を下さった

ブラスト様、雨季様、池上竜馬様

ありがとうございます！

第七話「温泉街での決闘！前編」

第七話「温泉街での決闘！前編」

セイバーさんを召喚して数日、世間ではゴールデンウィークとなっています。

ゴールデンウィークでは、ここ、高町家もお店はバイトの人に任せて旅行に行くことになってます。

今回のメンバーは、高町家＋アリサちゃん＋すずかちゃん＋忍さん＋ノエルさん＋ファリンさん＋ユーノ君＋セイバーさんの総勢12名の大所帯になってます。

セイバーさんとは、家族の皆と色々話し合って、もう家族の一員です。

セイバーさんは、どうやら土郎お兄ちゃんとは違う平行世界から来たそうです。

それでも、土郎お兄ちゃんは、土郎お兄ちゃんみたいで、やっぱり無茶をしてたそうです。

アーチャーさんの話題になりましたけど、セイバーさんは知らないみたいです。

それでも、魔法の特訓もしてるし、今度は負けないように頑張りたいです！！

* * * * *
* * * * *

温泉からでて、私はアリサちゃん、すずかちゃん、セイバーさんと

の4人で、温泉街に出てます。

ユーノ君は、本当は男の子だからと、お父さんと恭也お兄ちゃん、ユーノ君が大きく主張してきて、私たちとは別に、男湯の方に行ってしまいました。

「ねえ。この温泉街の散歩が終わったらさ、卓球しない？」

「たつきゆう、ですか？」

あ、やっぱセイバーさんは、卓球やった事無いんだ。

「はい、簡単に言くと、ラケットでボールを打つ、スポーツなんですよ、セイバーさん。」

「なるほど、らけつと、と言う物は何か解りませんが、スポーツなのですね。」

解説をありがとうございます。スズ力。」

この後、卓球をやる事も決まり。

ただ、散歩してるだけなので、宿に戻って、卓球をやる事になりました。

私たちが、引き返そうとした時、

「はぁーい、おちびちゃん達」

オレンジ色の紙をした女の人に声をかけられました。

「ふむふむ……」

あんまし賢そうには見えないねえ……

ただの、ガキンチョに見えるけど……」

「なのは、知り合い？」「ナノハ、知り合いですか？」

私は、この人にあつたか思い出してるけど、思い出せず、顔を横に振ります。

「この子は、あなたの事を知らないようですが、どちら様ですか？」
アリサちゃんが、あの人を睨みつけながら言います。

いざとなつたら、私やセイバーさんが守らないと！！

「アハッハッハッ……」

ごめんね、人違いだったや、知ってる子に似てたからさ。」

「あ、なんだ。そうだったんですか……」

女の方は、そう言っで私たちの横を歩いていきました。

『今の所は、挨拶だけだよ。』

いきなり届いた念話に、いつでも投影できる準備をします。

（レイジングハートは、ここだと目立ちすぎる！！）

『忠告しとくよ。』

子供は、大人しくしときな、おいたが過ぎると、ガブツつと行くよ！！』

そう言っで、あの人は去っでいきました。

たぶん、あの人は、フェイトちゃんの仲間だ！

「アリサ、このまま戻れば、さっきの輩と、また遭遇します。

もう少し、この辺りを、散歩しませんか？」

「そう、ですね。

なのは、すずか、もう少し散歩しよー！」

私たちは、そのまま散歩しました。

* * * * *
* * * * *

あれから、ユーノ君と合流して、さっきあつた女の人について話し合いつたところ、フェイトちゃんの仲間だろう、と完結しました。

それで、戦う時は、私がフェイトちゃん、セイバーさんがアーチャーさん、ユーノ君があの方の人と決定しました。

「ユーノ君、戦闘になるけど大丈夫。」

「うん、僕は大丈夫だよなのは。

ずっと、フェレットだったから魔力も大分回復できたし、

セイバーさんは、大丈夫ですか？」

「私は、問題ありません。

アーチャーの足止めはしっかりします。」

そう話し合っでると、ジュエルシードが、発動したみたいです。

「それじゃ、頑張ろうー！！」

「うん!」「はい!」

* * * * *
* * * * *

私たちが、大急ぎで来ると、フェイトちゃんと、アーチャーさんとさっきの女の人がいます。

ジュエルシードの反応が無いから、たぶん先を越されちゃったんだ

……

「あーらあらあら、大人しくしてろって折角忠告したのに来ちゃったのかい?」

「そのジュエルシードをどうする気だ!それは危険なものなんだぞ!?!」

「アルフ、君はそんなの事をしてたのか……明日の朝食のおかずを一品減らせたいか?」

「ちょ、ま、まってくれよ、アーチャー。ただ、忠告しに行っただけだから、そんな事しないでくれよ!!」

ユーノ君が、叫ぶけど、アーチャーさんにはぐらかされます。

「そ、それより、あたしは、親切で言っただよ。

おいたが過ぎると、ガブツと行くよって!!」

そういつて、アルフ?さんは、狼になりました。

「なのは、セイバーさん!あいつ、使い魔だ!!」

「そうさ。あたしはこの子に創って貰った魔法生命体。

この子の魔力で生きる代わり、命と全の力で主を守るんだよ!!」

そう言つて、アルフさんが襲い掛かってきました。

ユーノ君が、私の肩から跳び、障壁を張ってアルフさんの攻撃を防ぎました。

「なのは、作戦通りに行こう!」

「うん!!」

「ま、転移の魔方陣!!しまて」

ユーノ君は、アルフさんと一緒にどこかへ転移して行きました。
「……良い使い魔を持ってるね。」

「ユーノ君は、使い魔じゃなくて、友達だよ！」

「今度は、油断しない!!!」

そう言つて、フェイトちゃんが私に近づいてきました。

私は、レイジングハートで弾きながら、この場を離れます。

side out

side セイバー

ナノハがフェイトを、ユーノがアルフを、相手にこの場を離れて、私とアーチャーの二人だけになります。

「久しぶり、いや、始めましてといった方がいいですか、アーチャー？」

「その口ぶりだと、どうやら俺の事を知ってるみたいだな……
久しぶりだな、セイバー。」

「私”、では無く”俺”ですか……どうやら、彼は私が知ってるアーチャーとは少し違いそうだ。

「セイバー、君は、どの平行世界から、来たんだ？」

「あなたと、士郎が戦い、士郎がかった世界からです。」

「なるほど、どうやら俺と似た……または、同じ世界から来たみたいだな。」

なるほど、つまり彼はあのアーチャーのようですね。

「あなたは、まだ士郎を殺したいと思えますか？」

「いや、もう思っていないよセイバー」

えっ！？もう士郎を殺そうと思っていない、彼は、答えを得られたのでしょうか？

「まったく、皮肉だよな。殺そうとした相手と、裏切った相手から
答えを得れるなんて……」

これで、これでアーチャー……いや、士郎も救われたのでしょうか？

それなら、とても嬉しいですね。

「それでは、私たちも戦いますか、”シロウ”」

「ああ、マスターが戦ってるのに俺達だけが話すのも変だしな。この事件が終わったら、ゆっくり話したいものだな。」

「それはいいですね、シロウ。」

私たちは、互いに笑いあった。
エミヤの笑顔は、あの士郎の笑顔そっくりです。二人が同じ人だとよくわかりますね。

「そうそう、私のマスターのナノハの魔術の師匠が、士郎でしたので、ナノハのまえでは、アーチャーと呼びますね。」

「まったく……平行世界の俺はなにやってるんだか……」

ふふ、まったくですねシロウ。

「では、いきますよ！」

「ああ、セイバー！」

この事件が終わって、早くシロウの御飯も食べたいですね。

第七話「温泉街での決闘！前編」（後書き）

ユーノの淫獣フラグ回避！！

個人的には、ユーノはあまり好きじゃないんです！！

そして、ついに邂逅したアーチャーとセイバー！二人の約束を早く叶えさせてあげたいです！！

最後に感想をくれた

ブラスト様、雨季様、シャオレイ様

ありがとうございました

第八話「温泉街での決闘！後編」（前書き）

一週間ぶりの投稿です。

今回は、後編ですので、前編を見てない方は（たぶんいないと思うけど）

前編をみてください！

第八話「温泉街での決闘！後編」

第八話「温泉街での決闘！後編」

海鳴市から、外れの辺りにある海鳴温泉。

今、ここでは、二人の少女達が戦っていた。

金色の槍のような魔法弾と桜色の球体のような魔力弾が、お互いをぶつけ合い相殺していく。

なのはは、まだ慣れず術式が甘く脆い誘導弾で牽制していき、接近するチャンスを狙っている。それに対し、フェイトは、

なのはが魔法に慣れていないことを知り、遠くから最低限の魔力弾で接近させまいと、距離をとっている。

簡単に言えば、なのはの10の魔力で作った誘導弾に対し、フェイトの1の魔力で作った誘導弾で相殺していることになる。

これを繰り返しており、戦況は均衡しておる。

（このままだと、魔法に慣れてるフェイトちゃんに負けちゃう！！）

（この子、魔法に関しては初心者なのに接近戦では強い！！）

お互いが、相手の事を賞賛し、勝つ為に戦略を考えている。

フェイトは、自慢のスピードにより高速に接近し、一撃で倒せるタイミングを探っている。

それに対し、なのはは、消費の多い投影魔術を使わずに、強化の魔術で身体強化しつつ、最低限の魔力で接近するタイミングを探っている。

だが、使用できる魔法が多いフェイトに対し、使用できる魔力が、少ないなのはは、長期戦では、手札が少なく、応用性にも掛けて不利である。

（（ここは……勝負に出るしかない！！））

お互いに、一つの賭けにでることにした！

なのはは、己が使える切り札の一つ、”ディバインバスター”を、
フェイトは、あまり得意ではない砲撃系の魔法”サンダースマッシャー”の術式を発動した。

「ディバイン……」

「サンダー……」

『「バスター……」』『「スマッシャー……」』

桜色の砲撃と、金色の砲撃がお互いの杖から放たれ、ぶつかり合う。
お互いの魔法が、ぶつかり合い均衡している。

だが、均衡はしているお互いの砲撃魔法は、徐々に消滅していき、
終いにはお互いの砲撃魔法は、消滅してしまった。

砲撃を打ち終わったなのはは、砲撃の先に本来居るはずのフェイト
を見ようと目の前を向きが、そこには、フェイトは居なかった。

「はあ……」

だが、下からフェイトの叫び声が聞こえた。

なのはは、大急ぎで声のほうを向くと、そこには高速魔法で接近し
てくるフェイトが見えた。

フェイトの手には、ハーケンフォームにしたバルディッシュを持っ
ていた。

フェイト自身、なのはを切りつけようとは思っておらず、寸止めに
して負けを認めさせる気だ。

だが……

……フェイトの振るバルディッ
シュを、なのはは紙一重でかわし距離をとった。

そして、さっきフェイトを確認した際に、術式を一つ起動させてい
た。

その術式は……

『「デイベインセイバー」!!!!』

「っ!!!!」

二つの桜色の短剣型魔力弾が、ブーメランの様に飛び、フェイトへ向かっていった。

フェイトは、“ソニックムーブ”を連続で行い、ブーメランの様に、何度も向かってくる“デイベインセイバー”をかわし、バルディッシュで切り裂いた。

なのはは、その隙に……

「トレス・オン 投影開始」

莫耶を投影し、フェイトへと接近していった。

「!しまっ……」

だが、接近するなのはの目の前を一本の矢が、進行を妨害した。

その矢により、なのはは、立ち止まってしまふ。

フェイトは、その矢により出来た隙を、利用し、“ソニックムーブ”で、なのはに接近し、

なのはの首筋にバルディッシュを添える。

『プット・アウト』

「レイジングハート!?!」

なのはは、いきなり、自分の相棒が勝手に、ジュエルシードを出したのに驚いてしまった。

「……主思いの良い子だ」

そう言い、フェイトは、近くの木まで跳ぶ、そうしていると、二人の相棒達が戻ってきた。

「はああ、さ、さすがフェイト!」

「もう少し、予想外に対する対処方を学んだ方がいいぞ、フェイト。」

「

「そんな……」

「すみません、ナノハ。油断しました。」

ユーノとアルフは、息を切らせている。

セイバーは、何やらやり切れない顔をし、アーチャーは、黒塗りされた弓を持ち不敵に笑っていた。

「それじゃ行こう、アルフ、アーチャー」

「待って！」

このまま去ろうとする、フェイト達をなのはは呼び止める。

「私は、高町なのは！！あなたは！！？」

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

そう言い、フェイト達は、飛び去ってしまった。

第八話「温泉街での決闘！後編」（後書き）

今回は、なのは対フェイトです。

意外と、なのはが強くしすぎたかも…………

そして、作中で使われた新魔法”デイベインセイバー”の説明をします。

デイベインセイバー

なのはの誘導弾”デイベインシューター”を改良し作った魔法。
短剣型の魔力弾（魔力刀？）。

イメージとしては、干涉莫耶が桜色になり、小型化した感じです。
ブーメランの様な軌道をし、相手に襲い掛かります。

この魔法は、なのは自身氣にいつており、デイベインシューターより手を掛けており、術式にはむらが無く出来ている。

将来的には、”デイベインセイバー・ブラスト”と言う魔法も加わる
デイベインセイバー・ブラストは、デイベインセイバーを引き寄せる性質を持つ。

最後に感想をくれた、

煌焰様、ノース様、雨季様

ありがとうございます

第九話「戦いを終えて！フェイト組side」

第九話「戦いを終えて！フェイト

組みside」

side アーチャー

「なに？戦い方を教えて欲しい？」

「う、うん……」

俺と、フェイト達はさっきのジュエルシールド争奪戦を終えて、占拠であるマンションに戻ってきた。

が、戻るなり、フェイトが戦いを教えて欲しいと頼まれてしまった。

「フェイトは、今でも十分に強いと思ってるが……」

「そうだよ、フェイト。アーチャーの言う通り、フェイトは強いよ。」

「これは、俺の本心だ。」

フェイトなら、聖杯戦争時の俺に楽勝で勝てるだろう。

むしろ、もう少し戦闘経験をつめば、たいていの魔術師にも勝てるはずだ。

「うっん、私は弱いよ……」

この前の戦いや、今日の戦いで、アーチャーが援護してくれなかったら……

たぶん、私はあの白い子に負けてよ……」

確かに、あのまま行けば、フェイトは負けていたかもしれない。

あの白い魔導師（確か、なのはだったか）の戦い方は、昔の俺に似

ている。

戦いの中で、わざと隙を作り、そこをついてきた相手へのカウンタ―を主としている……

だが、それはあくまで衛宮士郎の戦い方。あの子の戦い方じゃない。おそらく、その為に自分のスタイルを、少し変えたのだろう。

技術が荒削り過ぎたからな。

「ふむ…フェイトが、弱いと言うより、あの子の戦い方がそう思わせているのだろう。」

「？どういうことだい、アーチャー？」

「あの子の使える手札の中に、フェイト達が使う魔法とは、違うものがあつただろう？」

「うん、あの子が”トレース・オン”って言うと、アーチャーが使う双剣が出てきてた。

始めは、転移系の魔法かなって思ったんだけど、魔方陣が出てなかったから、私たちとは、別の力だって分かった。たぶん、あれはアーチャーと同じ力だと思う。」

さすがフェイトだな。

あの少ない情報から、そこまで分析出来るとは……

これは、魔術について、少し教えておくか。

「ああ、その通りだ。」

あの子の使う力は、俺と同じ魔術だ。」

「「魔術？」」

「ああ、魔術は、この世界に限りなく似ていて、限りなく違う世界。平行世界という、所にある、地球の魔術体系だ。」

「平行世界？」

「なあ、アーチャー？」

その話で、アンタについても分かるのかい？」

フェイトは、平行世界について考えているようだが、アルフは俺と言う存在について分かるかも知れないと言う期待の籠った目をしている。

（まったく……初めて会った時より、かなり懐かれているな）

「ああ、俺はとある平行世界で生まれ育ち、英雄となった存在なんだ。」

その世界には、フェイト達が言う魔法も次元世界もない。

魔術師と呼ばれる者たちが、己の魔術の研究を隠れてと行っている。

「

「？なんで、隠れてるの？」

「魔術はな、フェイト。秘匿しなきゃいけないんだ。」

魔術師の中の法律とえば、魔術を秘匿することだけなんだ。」

「そうなんだ。」

「それで、アーチャー？」

アーチャーと、あの白い子が使ってる魔術ってなんだい？」

まったく、アルフはせっかちな……まあ、いいか。

「俺もあの子も、使ってる魔術は投影と言っ魔術なんだ。」

「「投影？」」

「そう、簡単に言うと、魔力で物の偽物を作る魔術だ。………ほら」

そう言い、俺は口の中で、投影開始と呟き、フェイトの杖であるバルディッシュを投影する。

（うん、なかなかの出来だな。ただ、やっぱり中の精密機械の方は、投影できなかったか。）

フェイト達は、俺が投影したバルディッシュ（偽）と、今フェイトがセットアップしたバルディッシュ（真）を交互に眺めている。

「す、す」……」

「ほ、ホント……バルディッシュそっくり………」

「これは、ただ似ているだけだよ。」

中身が無いから、これを使って魔法は使えないさ……

まあ、剣だったら、本物に限りなく近い偽者を作れるさ。」

「………ねえ、アーチャー？」

「どうした、フェイト？」

「私にも魔術、使えるかな？」

ま、待て、今フェイトはなんて言った。

魔術が使えるかだと……俺としては、お勧めは、出来ない。

魔術は、まず自分を殺す事から始めなくちゃいけないし、この世界にはフェイトが言うとおりなら、時空管理局と言う組織がある。なら、フェイトに魔術を教えれば、管理局とやらが黙っていないだろう。

つて、アルフ！お前は、今何をフェイトに教えている！！？

「だめ……かな？」

ふえ、フェイト、そんな涙目＋上目遣いをするな。俺の良心を削るな！！

それより、どこでそんなのを覚えた！！あれか！さっきの、アルフの耳打ちで教えられたのか！！？

しかも、”諸悪の根源（アルフ）”は、腹を抱えて大笑いか！！！
つて、アリシア（フェイトとアルフには見えていない）！！お前もか！！！！

くそっ……

「……明日、適正があるか、調べよう……」

適正があつたら、教えるよ……

だから、今はもう寝てくれ」

「うん！アーチャー、お休み！！！」

フェイトは、意気揚々と寝室に向かう。ちなみに、アルフは、まだ笑っている。

なんでさ……

第九話「戦いを終えて！フェイト組side」（後書き）

今回は、温泉街でも戦いのあとのフェイト達でした！

っというか、アーチャーが大分壊れた気がするけど、気にしない方面でお願いします！！

このまま行くと、フェイトも魔術師フラグが立つかも……

最後に、感想をくれた

雨季様、Rowain様

ありがとうございます！！

第十話「戦いを終えて！なのは組side」（前書き）

前は、フェイトグループの反省会でしたが
今回はなのはグループです。

第十話「戦いを終えて！なのは組side」

第十話「戦いを終えて！なのは組side」

de」

side なのは

「すみません……ナノハ……」

今回の戦いが終わってから、一日立ちました。

けど、セイバーはずっとこんな調子です。

アーチャーさんと戦ってる途中、弓の迎撃に専念しすぎて、フェイトちゃんへのサポートを許してしまったことを、ずっと悔やんでるそうです。

しかも、それで私が、負けてしまったことが、追い討ちになったそうです。

「大丈夫、セイバーさん。次は、負けないようにがんばろ！」

「そうですよ、セイバーさん。あの、アーチャーって人が強かったんですよ。」

「いえ、ユーノ。彼は、弓以外の才能はありません。

ですが、弓の腕なら誰にも負けないほどの実力があります……」

アーチャーのサーヴァントだから、弓とか銃を得意としてるのはわかってますが、アーチャーさんは、士郎お兄ちゃんからのお話だとよく双剣（干将莫耶）を使ってるって聞いてましたけど、弓の腕前は聖杯戦争中に見た事が無かったらいいので、知りませんでした。

「……アーチャーって言う名前は、伊達じゃないってことなんです

ね……」

そっか、そう言えばユーノ君には、サーヴァント（魔術も）について教えてなかっただっけ……

士郎お兄ちゃんには、魔術は秘匿するように言われてたから……サーヴァントくらいなら教えていいよね。

「ユーノ君、サーヴァントについて教えてあげるね。」

「え、いいの……？」

魔術に関しては、秘密にしないといけないでしょ」

「うん。だから、サーヴァントについてだけね。」

サーヴァントっていうのはね。簡単にいうと過去や未来で偉業を行った人たちが、死んじゃうと英霊っていうのになるの。英霊になった人は、座って呼ばれる時間が無い世界に行くの。」

「過去や未来での偉業って、それじゃあセイバーさんは、前は英雄だったんですか……？」

「はい。私は、生前では一国の王を務めてました。」

今の時代では、アーサー王伝説と言う本などで、語られています。」

セイバーさんがそう言うのと、ユーノ君が固まっちゃいました。

にやはは、やっぱり今まで一緒にいた人が、王様だった人だなんて驚いちゃうよね。

「えっと、続きを話すね。」

それでね、英霊になって座に行った人たちはね。

聖杯戦争っていう儀式にサーヴァントとして召喚されるの。

サーヴァントは、”セイバー”・”アーチャー”・”ランサー”・

”ライダー”・”バーサーカー”・”アサシン”キャスター”の七

つに分けられるの。

分けられ方は、その人にどのクラスが適しているかで、分けられるの。

それなら、本当の名前もばれないから、弱点とか分かりずらいの。」

「私は、王であり、騎士でもあったのでセイバーのクラスに当てはまりました。」

「それが、サーヴァントなんだね、なのは。」

「うん、そうなの。」

簡単にだけど、これで解ってくれたならいいよね。

「ってことは、あのアーチャーって奴も英雄だったのかな？」

「うーん、どうなのかな？」

私は、アーチャーさんについては知らないから分からないや……

セイバーさんは、どう？」

「私は、彼の正体は分かりません。」

ですが、彼は反英雄ってことは知ってます。」

「「反英雄？」」

反英雄って、士郎お兄ちゃんは、教えてくれなかったな……

どういう人、なんだろう？」

「反英雄っていうのは、過去や未来に偉業をこなしたのではなく、何らかの悪事などにより、語り継がれた者です。例えば、アサシンのクラスの英霊なら、暴君である王を暗殺することで、一般的に悪ではありますが、民衆からは英雄と言われたりします。」

アーチャーの場合は、”多くの人を助ける為”に人を殺してしまっていた為、一般的に悪とされたからです。」

セイバーさんの言葉に、私は反応してしまいます。

”多くの人を助ける為”

まるで、士郎お兄ちゃんのような生き方です。

「で、でもセイバーさん、アーチャーについてそんなに知ってるなら、本当の名前が分かるんじゃないんですか、セイバーさん？」

「いえ、彼の場合は、それほど有名じゃないらしく、分かりませんでした。」

「そう……なんですか

って、なのは、どうしたの？」

あ！いけないいけない。

つい、考え込んでしまった。

「大丈夫だよ、ユーノ君。」

ちよつと、考え事してただけ……」

やっぱり気になるな……

さっきの話聞いてからずっと、アーチャーさんのこと考えると、なぜか士郎お兄ちゃんのことを思い出しちゃいます。

「ナノハ、あまり深く考えすぎない方がいいですよ。

考えすぎれば、回りが見えなくなってしまうです。」

「うん、セイバーさん……」

……そうだ！セイバーさん、恭也お兄ちゃんと模擬戦してみない？」

「恭也とですか？」

確かに、以前模擬戦を挑まれましたが……」

「お兄ちゃんたちは、御神流っていう剣術を使ってるの。

もしかしたら、いい経験になると思うの。」

「そう……ですね。」

明日、模擬戦を挑んで見ましょう。」

これなら、セイバーさんも、立ち直ってくれるかな？

第十話「戦いを終えて！なのは組side」（後書き）

今回は、ユーノへのサーヴァントの説明と

なのはが、アーチャーへの疑いです。

ちなみに、セイバーの決戦フラグは、セイバー強化フラグのもなっています。

最後に、感想をくれた

ヴラドⅡツエペシユ様

ありがとうございます。

第十一話「特訓開始！」（前書き）

最近、色々と立て込んでいた為、遅くなってしまうすみませんでした。

第十一話「特訓開始！」

第十一話「

特訓開始！」

side アーチャー

さて、今日は昨日の約束通りフェイトに魔術回路があるか調べることになった。

結果を言うならば、フェイトには魔術回路があった。

ただ、本数が少なく三本しかなかったのは、ご愛嬌だ。

にしても、調べた時は既に、魔術回路が開きかけていたな。

やはり、違う魔術体系だが、魔力を使うのが同じ分魔術回路が共鳴したのかもしれない。

「それでは、フェイト。次は、魔術回路の起動をしてみてください」

「うん、やってみるねアーチャー。」 セット・アップ “起動開始”！！！！」

フェイトは、目を閉じ魔術回路を起動させたようだ。

やれやれ、もう起動させることが出来るとは……やはり、才能があるな、フェイトは……

その才能を、生前の俺にも分けて欲しいものだ……

「なあ、アーチャー。」

「む、どうしたんだ、アルフ？」

「フェイトは、今のところどうなんだい？」

フェイトの状況を聞きたいのか。

魔術は、命の危険もある分、とても心配そうだな。

「ああ、大丈夫だよ。むしろ、何故魔術回路を一発で起動できるか、聞きたいくらいだ。」

「さっすが、フェイト♪魔法だけじゃなくて、魔術でも才能あるのかい♪」

『さっすが、私の妹だよ、フェイト~~~~~♪』

まったく、アルフもアリシアも子供だな。

喜びから、走り回って（飛び回って）いるよ。

「アルフ、落ち着け。アリシアもだ。」

『は~~~~い』

「？アーチャー、アリシアって誰だい？？」

む、アルフそこに居る……って、アリシアは幽霊だと言っ事を忘れていたな。

あまりにも、普通の人間っぽいからな、アリシアは……

「ああ、大丈夫だ。ただの、幽霊だ。」

「ゆ、幽霊……！ちよ、大丈夫なのかい……！！……？？」

「大丈夫だ、たぶん………無害だ」

「ちよ……！たぶん……！めっちゃ怖いわ！」

『それに、今の間は……？ちゃんとやってよ……！私は、無害だつて……！』

まったく、二人ともからかいやすいな。

このからかい易さは、凜以上だな。

「ご……めん………二人、とも………ちよっと、静かに………してもらえるかな？」

突然、フェイトから声が発せられる。

フェイトの方に向くと、かなりの汗をかいたフェイトが居た。

そろそろ、やめた方がいいな。

「フェイト、魔術回路を閉じろ……！！」

「う、うん」

そう言つて、フェイトは魔術回路を閉じた。

やれやれ、もう魔術回路をコントロールできているよ。

「どう…だったかな、アーチャー？」

「ああ、完璧にコントロールできていたぞ。

後は、何度もやって慣れるだけだ。だから、今は休め。」

「うん、そうするね。」

フェイトは、そういつて寝てしまった。

今日は、ジュエルシード集めを休んだとある一日だった。

s i d e o u t

s i d e セイバー

今日は、昨日ナノハと約束した通り、キョウヤと模擬戦をすることになりました。

場所は、高町家の道場で、審判にシロウ（高町）が行います。

見学として、ナノハ、ユーノ、ミユキ、モモコ、そしてアリサにスズカ、シノブが来ています。

何時の間にこんな大所帯になったことやら……

ですが、私のマスターであるナノハに恥をかかせるわけには行きませんね……！！

「それでは、ルールの確認だ。お互い、得物は木刀のみ、どちらが気絶また致命傷を負うかで勝負は決まる。セイバー君は、魔力放出は禁止それでいいか？」

私たちは、互いに得物に力をいれ、頷きます。

「それでは、開始！！！」

「はああああああ！！！」

私は、開始の宣言と共に、キョウヤに向かい得物を振り下ろします。キョウヤは、二本の木刀の内、一本でこちらの攻撃を受け流し、もう一本で追撃してきますが、私はすぐさま薙ぎに変え迎撃します。けれど、互いの得物がぶつかり合った途端、私の腕に強力な衝撃が来ました。その衝撃で、思わず木刀を手放しそうになりましたが、気合で手に力を入れ耐えます。

私は、一度その場を離脱しますが、私の直感がすぐに横に薙げと訴えてきました。

私は、直感を信じ得物を薙ぐとそこには、キョウヤが得物を振り下ろしていました。

まさか、あの一瞬で私の横に移動するとは……

驚きをよそに、キョウヤの追撃に私は、自らの得物で防ぐしか道がありません。

けれど……

「ぐっ！！！！？」

……キョウヤの一閃が、私の剣をすり抜け、私を切り飛ばしてきました。

痛みには耐えながら、立ち上がります。

衝撃を与える斬撃に、瞬間移動をする歩法、防御をすり抜ける一閃

……

これが、御神流ですか……

これらの技を、総合すればアサシンのツバメ返しを上回りますね……

「セイバーさん、あなたの剣には迷いがあります。」

キョウヤが、静かに語りかけてきます。

迷い……ですか……

私に迷いなど……一つだけありましたね。

シロウ（アーチャー）と戦いたくないという迷いが……

「迷いのある剣では、俺……いや御神流には勝てません！！！」

私は、どうすればいいのでしょうか……

シロウ（アーチャー）とは、戦いたくない……けれど、ナノハのために敵にならなければいけない。

こんな剣では、誰も守る事が出来ない……

「セイバーさん！！！」

「ナノハ」

「セイバーさんが、何に迷っているか分かりません。けど、戦う事に迷いがあるんだったら、

全力全開で行けばいいんです！全力全開、手加減無しで！！戦いで話せばいいんです！！！」

くすっ、ナノハそれでは私の迷いに気づいているといってるようですよ。

ですが、その理論なら

シロウ（アーチャー）の敵として戦うのではなく、話すために戦えますね。

それなら、私も戦えます。

まったく、マスターの教えをもらうなど、サーヴァント失格ですね

……

だからこそ、今までの失態の分しつかりと役に立ちますよ！！

「キョウヤ、さっきまで腑抜けた剣だったことを謝罪します。

だからこそ！ここからは、迷いの抜けた私の剣で！！全力全開でいかせてもらいます！！！」

「ああ、俺も、俺の……いや御神流の奥義でいかせてもらおう！！！」

私は、剣を腰の横に寝かせて構えます。

キョウヤは、抜刀術の構えをとります。

「はあああああ！！！」

「薙……………」

私たちは、そのままの体勢で走ります。

「ウイングエア・トラスト！！！」

「……………旋！！！！！」

私たちの剣が、ぶつかり合います。そして……

「四連続抜刀ですか……いい剣でした。」

ですが、まだ甘い。私は、以前三同時攻撃を破った事があります。」

「勝者セイバー君……!」

立っているのは、私のみ。

キョウヤは、胸を押さえながら片膝をついています。

「まさか、薙旋が破られるとはな……」

そう悔いる事はありませんよ、キョウヤ。

あなたの剣にける思いは伝わりましたよ。

あなたが、その剣で誰かを守り抜きたいと言う事が。

それが、御神流の本質なのでしょう。

その考えは、サーヴァントである私にとって、教えを得たいほどです。

……そうだ……!

「キョウヤ、私に御神流を教えてくださいませんか?」

「なっ……!」

「ふむ、それはいい考えだな」

「と、父さん……!」

「別にいいじゃないか、キョウヤ。」

セイバー君も私たちの家族だ。教えても構わないだろう。」

「……それもそうだな」

「それでは、よろしくお願いしますキョウヤ。」

私は、きつとまだまだ強くなれます……!

今度は、マスターであるナノハも、高町家の家族も、親しき友達も、

そしてシロウ（アーチャー）あなたも……

あなたや、ナノハだけではありません。

私も、この剣で正義の味方を目指して見せます……!

第十一話「特訓開始！」（後書き）

今回は、フェイトの魔術特訓とセイバーの強化が主となっています。セイバーが、御神流を習う事を、誰か予想が出来た人がいるでしょうか？

最後に感想をくださった。

KOB様、雨季様、普通様

ありがとうございました。

第十二話「守る為の力」(前書き)

やっと、構想が固まった…

約三ヶ月ぶりって…

でも、これが終われば後は、大体は固まってるから速めに書けそうです

第十二話「守る為の力」

第十二話「守る為の力」

「ッ！ナノハ！！」

「うん！行こう、セイバーさん、ユーノ君！！」

夕食後、セイバーさんと特訓をしていたら、急に魔力反応を感じました

この魔力反応は…ジュエルシード！！

幸い、私たちがいる場所は、近くの臨海公園です

ここからなら、強化の魔術を使えば、直ぐに着ける！！！！

「行こう、なのは！」

「うん！トレス、オン強化開始！！！！」

ユーノ君が、私の肩に飛び乗った瞬間に強化の魔術を使用します
急がないと！！

しばらくして、急に違和感を感じました

「これは、結界！？なるほど、これで一般人に気づかれ無くしたのか…」

「結界の魔術…ううん、魔法なの？でも、これなら全力でいけるね！行こう、レイジングハート」

『はい、行きましょうマスター！』

レイジングハートを起動させます

それから、走っていると直ぐに、フェイトちゃんたちを発見しました！

「見つけた！」

「ッ！バルディッシュ！」

「「ジュエルシードシリアル19！封印！」」

私のレイジングハートから出るリボンと、フェイトちゃんのバルディッシュから出る黄色い魔力弾が、ジュエルシードを封印します

「なのは、速く確保を！」

「させると思ってたかい…！」

ユーノ君の相手は、またアルフさんと相手をするみたいなの

「さて、こっちも始めようか、セイバー」

「ええ、修行の成果を見せてあげますよ！アーチャー！」

「やれやれ、ただでさえ強い君が、さらに修行をしたのか？勘弁して欲しいものだ」

やっぱり、セイバーさんの相手はアーチャーさんみたいです
なら、こっちも始めましょう！

「行くよ、フェイトちゃん！」

「前と同じで、ジュエルシールドを賭けて勝負です！」

行きますよ！フェイトちゃん！！

s i d e o u t

s i d e アーチャー

やれやれ、いつも見ているが、やはり無茶ばかりする子たちだ
アリシアから、簡単に事情を聞いていたが…まさか、之ほどの思い

とはな

フェイトは、母親であるプレシア・テストロッサの為。そして、アルフはフェイトの為…か

にしてもフェイトの理想は、俺と似ている…いや、似すぎている
適わない理想を、適うと思ひたすらと努力する所が…

フェイトが…自分が、アリシアの偽者だと知ってしまったら、きつ
と心が壊れてしまう…プレシアからは、フェイト・テストロッサで
はなく、アリシア・テストロッサとしか、見られていなかったんだ
からな…

ここは、俺が動くべきだ

全ての事情を知っている俺が…

その為なら、俺の力全てを使おう…例えば、この身が消えようとも…！

「さて、行くか？セイバー」

「ええ、今度こそあなたに出し抜くほどの余裕は与えませんよ、シ
ロウ…！」

まったく、俺もあの時は運よく出し抜けただけだったんだがな…

幸運Dの俺が、あんな幸運があったのは、これを見越してなのか？

「では、君の敗北に賭けるとしようか」

「ならば、私はあなたの敗北に賭けるとしましょう！」

声に出さず、口の中だけで呟くように言う

トレス・オン
(強化開始…)

昔から、使い続けた俺だけの呪文…いや、セイバーのマスターの高
町 なのはも同じ呪文を使っていたな…

確か、あの子の師匠は衛宮 士郎だったな

まったく、死んでもなお俺に嫌がらせするのか、アイツは…(アー
チャーは、この世界に來た士郎が死んだ事を、調べてあります)

「行きます！ふっ」

「せやつ！」

思考中断！仕掛けてきたか！

セイバーの強力な魔力の乗った一撃が、俺に迫ってくる

だが、俺はそれを受け止めずに干将・莫耶でいなす

くっ、相変わらずの馬鹿力だ

「…シロウ？今、変なことを考えませんでしたか？」

「い、いや、そんなことなど考えてないぞ、セイバー」

鋭い…セイバーの勘は、相手の思考内の悪口も見抜けるのか？

だが、俺だつて負けられない理由があるんだ！

俺は干将・莫耶で切りかかる

本来なら、俺の戦闘スタイルはカウンターだが、守ってばっかでは
いられない！

「はあ！」

「なっ！？くっ、せあ！」

普段俺が、カウンター重視のためだったから、いきなり攻められた
のは驚きだったのだろう

だが、その決定的な隙を見逃すわけにはいかない！

それからラッシュを繰り替えます！

防がれては次、防がれては次と、セイバーに攻める隙は与えない！

「くっ、ならば！はあ！！！」

「ぐっ…」

な、なんだ今の一閃は！？

今までの一撃とは、まったく違う…腕に直接振動が伝わってくる
だが、まだ未完成なのか、伝わる衝撃は小さい

もしこれが、さらに強ければ、確実に片腕をやられていた！！

「ふう…やはり、難しいですね」

「くっ…それが、さっき言っていた修行の成果なのか？」

「ええ、これが私の…いえ、私が教えを貰っている護る為の剣、御
神流の技・徹です」

「やれやれ、さらにやっかいな技を…しかもこれで、未完成なのか
！？」

恐らく、この世界で師事されている技だろうが…この世界の人間は、
アサシン・佐々木 小次郎のように技だけで宝具クラスの技を使え
る人物がいそうで怖いな…

「それでは、行きますよ！」

「来い！セイバー」

私も、この力をフェイトを護る為に使おう！

第十二話「守る為の力」(後書き)

今回は、次元振が起こる戦いのアーチャー&セイバー side の戦いでした

久々だからか、内容が薄い…

第十三話「託されたもの」(前書き)

……戦闘シーンを書くのが難しいです

第十三話「託されたもの」

第十三話「託されたもの」

「トレース・オン
投影開始！」

なのはは、自身の使い慣れた双剣を投影し、戦闘の準備をする
フェイトも、自身のデバイスをデバイスフォームからサイズフォー
ムへと変え、なのはを迎え撃つ気だ

「…この前は、あなたに翻弄されたけど、今回はそうは行きません」
「むう…フェイトちゃん、あ・な・たじゃなくてな・の・は！だよ」

戦闘前に、そんな軽口を言い合っているものの、二人はお互いの行

動に注意を払っている

さつきから、様子見だが…お互いに、走りだした

フェイトは、上段からバルディッシュを振り下ろし引くように切りつけてくる

なのはは、それを迎え撃つように下段から干将・莫耶で切り裂こうとする

そして、お互いの武器がぶつかり合い、金属音が鳴り響く

均衡は一瞬、互いにそのままバック・ステップで距離を取り、また攻めていき、何度も何度も切りあって行く

なのはは、士郎が昔兄である高町 恭也や父である高町 士郎との模擬戦を何度も見た事があり、その記憶を頼りにその戦闘法を編み出してる

最近では、よくセイバーと特訓をして改善などもしているが、なのは自身、士郎の戦い方があっている。なのはは、魔法の才能があるが、元々運動は得意な方ではなく、強化の魔術を使わなければ、一般の子供レベルしかない。そのためか、武術の才が無く、一流には決してなれない。よくて、二流止まりだ

だからこそ、なのはの戦闘スタイルは、士郎の戦闘スタイルと同じになってしまっている

それに対し、フェイトは今までリニスという使い魔から修行を受けていたが、あくまで魔法が主体

接近戦は、初心者以上の領域でしかなかったが、アーチャーとの特訓のおかげで、今ではかなり腕を上げているが、今だになのはを越すレベルでは無い

だが、アーチャーと戦略を立てたお陰で、何とかなのはと互角に戦っている

フェイトは、スピードが速く、高速戦闘を得意としているので、目はいいい方だ

なので、その利点を大きく利用し、なのはの斬撃を捌いていくけれど、小型の武器を扱うのはと中型の武器を使うフェイトでは、

どうしても手数ではなのはが上である。そのため、フェイトでは捌ききれない所が致命的である

なのはの干将・莫耶は、怪我をしない為に刃を潰してあるが、それでも直撃すれば危険だ

フェイトは、捌ききれないと理解した時は、高速魔法の『ブリッツアクション』で回避している

けれど、さすがに接近戦では勝てないと悟ったフェイトは、飛行魔法を行使して上空へと逃げる

「あつ！投影破棄…トレス・アウトレイジングハート、お願い！」

『待つてました！スタンバイ・レディ・セットアップ』

なのはは、直ぐに投影を破棄し、デバイスを起動する

そのまま、飛行魔法を展開し、上空へと逃げたフェイトを追いかける

「…接近戦では、あなたに分がありますが、魔法では負けません！」

「だから、な・の・はだってば！でも、私も負けないよ！あれから、うんと特訓したんだから！」

二人の周りに、同時に3つの球体が現れる

「行つて、『デバインシューター』……！」

「迎え撃て、『フォトンランサー』……！」

同時に魔法を放つ

なのはの誘導弾の『デバインシューター』とフェイトの直射型の『フォトンランサー』

なのはは、フェイトの『フォトンランサー』を紙一重で避け、フェイトなのはの『デバインシューター』を自慢のスピードで振り切る

だが、いくらなのはが魔法の初心者でも、誘導弾に意識を集中すれば2個までなら操る事ができる

なので、なのはは振り切って今だ油断しているフェイトに、『デイベインシューター』で襲い掛かる

フェイトは、意識を集中しているのはを見て、好気だと思うが、今まで戦闘経験の高い動きを見せていたなのはが、急に意識を集中しだしたのに疑問を抱く。そして、直ぐになのはの狙いに気づいたなのはの狙いに気づいたフェイトは、急いでその場から離れ地面に立つと、自分が今までいた場所に2つ誘導弾が襲って来たが、目標に当たらず、そのまま近くのビルにぶつかって消えてしまう

（危なかった…直ぐに気づかなかつたら、誘導弾の餌食になってた）
「（にやはは…さすが、フェイトちゃん…私の狙いも直ぐに気づいちゃうんだ…でも、あの位置だったら！）これなら！『デイベインセイバー』！！！」

なのはは、直ぐにブーメランと同じ軌道をする魔力斬撃魔法の『デイベインセイバー』を展開し、フェイトへと飛ばす

放たれた、4つの『デイベインセイバー』は、フェイトへと向かって行くが、フェイトはそのまま地面の上で動き、回避していくが、当然動きが止まってしまう

「ッ！いつたい、何が…あっ！？」

突然、何かに引つ張られる感覚の性で進めなくなったフェイトは急いで状況の確認をすると、自分のマントになにやら黒い何かが刺さっていた。それは、マントを貫通し地面に深く刺さっている為、動く事が出来なかった

そのまま破ってしまいたいが、破れるが、少し時間が掛かりそうだ

「掛かったね、フェイトちゃん！行くよ、『デイベイーーーン……』」
「くっ、『サンダー……』」

まだ拘束魔法である『バインド』を使えないのはは、投影でクナイを投影し、『デイベインセイバー』を放つと同時に、フェイトの軌道上にクナイを放ち、マントに貫通させたのだった

本来なら、難しいが、空間把握能力を保有するなのはならではの技だそして、擬似バインド状態のフェイトに対し、なのはは得意の砲撃魔法の準備をする

フェイトも、今此处でクナイを抜くよりも、なのはの砲撃魔法を迎撃するほうが先決だと悟り、砲撃魔法の準備に移る

「バスターーーー！！！！」
「スマッシュャーーー！！！！」

お互いの放つ砲撃がぶつかり合う

勢いよく放たれた砲撃は、遅れて放たれたフェイトより拮抗を見せているが、少しづつ押し返されてるようだ

けど、なのはも負けじと魔力を注ぎ込み拮抗させる

二人は、お互いの信念の為、負けないために魔力を注いでいき全力でぶつかり合う

けれど、そんな二人に邪魔が入る

「え、何！？」

「ッ、しまった！」

いきなり、大きな魔力を感じた

その発生源は……先ほど封印したはずのジュエルシード
どうやら、二人の魔力を浴びて、暴走したようだ

「バルディツシュ、部分リリース！」

フェイトは、バルディツシュにバリアジャケットの一部の解除を命じ、マントを消す

動けるようになったフェイトは、そのままジュエルシードに向かうのはも、負けじとジュエルシードに向かう

ジュエルシードの近くまで来た二人は、デバイスをジュエルシードへと向けるがぶつかり合ってしまう

そして、ジュエルシードはその魔力の一部を解き放ってしまった

「きゃっ！」

「ああっ！」

その大きな魔力の性で、二人は吹き飛ばされる

幸い、デバイスが瞬時にバリアを張ってくれたおかげで、二人に外傷は無いがデバイスたちは輝が入ってしまい、使用できなくなってしまう

無理をすれば、使用できるがそんな事をすれば砕けてしまう可能性がある

「くっ！」

「待て、フェイト！今は危険だ！」

「放して、アーチャー！速く封印しないとー！」

「だから、待てといっているだろ！少しは、アレが落ち着くのを待て！今行くのは危険だ」

フェイトはアーチャーに掴まれ、行くに行けない状況になってしまふが、今はそれが最善の手だろう

今行けば、また強力な魔力で吹き飛ばされてしまう可能性があるならば、落ち着くのを待ったほうがいい。または、少しでも弱まる

方がいい

アーチャーは、そのままアルフに防壁を張らせる

「なのは、こっちも今は待った方がいい！」

「そうです、ナノハ。今行くのは危険です」

「で、でもそうしよう！レijingグハートが…」

『すみ…ません…マスター』

レijingグハートは、さっきの性で壊れかけてしまっている

バリアジャケットだって、今にも解けそうだ

向こうは、アーチャーがいるから次の振動を防げるだろうが、こっちはユーノだけじゃ心もとない

「ナノハ、私が魔力放出を全開にして、アレを緩めます。ですので、ユーノと共に、待っていてください」

「セイバーさん！そんな事したら、セイバーさんが危ないよ！」

セイバーは、自身がなのはたちの前に出て魔力放出を全開にし、盾になろうとするが、なのはに止められる

いくら、対魔力の高いセイバーでもあんな超高密度の魔力を浴びれば、危ないだろう

（考えてるんだ、この状況で一番いい手を！士郎お兄ちゃんなら、きっとこんな事も何とかできるんだから！！）

なのはは、士郎の様に何でも投影できる訳ではない

今なのはが出来るのは、干将・莫耶と簡単な剣闘類などの投影ぐらいだ

それでも、なのはは考える。そして、一つの希望を見つけ出す

（そうだ… 士郎お兄ちゃんが、私に託してくれたあの宝具がある！でも… 魔力が足りない… ど、どうしよう… 私のリンカーコアの魔力を魔術回路の魔力に変えれば…）

以前、ユーノが行ってくれた魔法の講習で、魔法の使う魔力が発生する動力源が、リンカーコアと呼ばれるものから出来ると聞いた。そして、ユーノに簡単にリンカーコアの魔力と魔術回路の魔力を比べてみてもらったところ、魔力の質が違うらしい例えるなら、水と油。同じ液体でも、決して交わらないものそんなものを、混じらせれば何が起こるかはわからない

（あれ… 魔力を変える… そうだ！）

「ユーノ君、セイバーさん。私がやります！」

「なのは！？」「ナノハ！？」

「大丈夫、きっと何とかできます！」

「でも、なの「ユーノ、ダメですよ」なんで止めるんですか、セイバーさん！！」

「ナノハの頑固さは、士郎譲りですので、きっと止められないでしょう。危険になったら、私が止めます」

「……はい」

（ありがとう、セイバーさん）

なのはは、ユーノの前に立ち、神経に集中させるその間に、ユーノはなのはとセイバーを包むように障壁を作る

（魔術回路とリンカーコアを繋げるラインに接続… うつつ、やっぱり負担がかかるよ…）

なのはは、魔術回路をリンカーコアを繋げるラインを接続する。もつとも、ちゃんと流れないように、関所のようなものが、無意識に出来てしまって、流す事は出来ていない

元々、なのははの魔術回路にはなぜか、分岐点があった

それを士郎に知らせ、調べた所、どうやら別の何かに繋がっていると聞いた覚えがあるのは

ユーノとの講習と魔法の使用で、それがリンカーコアである事を知った

昔、その関所のような所を開こうとして、えらい目にあった覚えもあるのだったが、今は違う

（次に、その関所のような所を開くと同時に、通る魔力を変換させる！）

そう、なのははの属性が変換だからこそできる荒業…それが、魔術回路とリンカーコアの同一化

なのははの属性である変換は、自分の魔力に関するものを変えることの特化している

そのため、自身の魔力を魔術回路とリンカーコアの魔力を合わされるものに交換することが出来るのだった

これにより、なのははの魔力の総数は伸び、魔術と魔法を同じもので使えることになる！

トレース・オン
「投影開始…」

そのまま、目を瞑り設計図を思い浮かべるが、それは鮮明で全ての工程をカットできている事に、なのはは驚くのだった

それは、まるで既に自分の半身のようだった

なのははの投影が終わると同時に、まるで待っていたかのようにと魔力の波を飛ばすジュエルシード

その波は、全てを飲み込む津波のようだったが、今なのはには関係がなかった

「あれは…私の…」

「なっ！ジュエルシード以上の魔力を秘めてるのか！？」

セイバーとユーノのそんな呟きを聞こえてくるが、なのはは聞こえないのか無視してその名を叫ぶ！

「アヴァロン全て遠き理想郷！！！」

そのとき、全てを包み込むような黄金の輝きなのはたちを包んだ

第十三話「託されたもの」(後書き)

……なのはの設定、元からそう考えてたけどかなりやりすぎだった
気がします…

これじゃ、変換の属性がかなりのチートになりそうです…

最後に感想を下さった

雨季様、tokki - 兄様

ありがとうございます！！

第十四話「プレシア・テストロッサ」（前書き）

テストも終わり、安心だっぜ!!

4月6日：プレシアさんsideを追加しました

第十四話「プレシア・テストロッサ」

第十四話「プレシア・テストロッサ」

side アーチャー

昨夜のジュエルシード争奪戦により、フェイトのデバイスであるバルディッシュは故障しかけてしまった

今は、フェイトとアルフと共に、休養中。バルディッシュも、今日の午後には直るとのことだ

俺は、一人歩きながら、昨夜のあの後の事を思い出す…

『^{アヴァロン}全て遠き理想郷！！！！』

その声と共に、辺りが黄金の光に包まれた

『な、なんなんだい！あの馬鹿魔力はっ！！！？』

『…なんだろ、すごく暖かい』

まさか、あの子が”^{アヴァロン}全て遠き理想郷”を持っているとは…

あの子は、必死に守っているのに、俺はどうだ？

障壁をアルフにまかせて、補助しかしていないじゃないか！！

『アルフ、私も全力を出す。下がっていたまえ』

『あ、アーチャー？ど、どうしたんだい！？』『アルフ！』『フェイト？』

『今は、アーチャーの指示を聞こ？』

『わ、わかったよ…アーチャー、頼むよ？』

『まかせておけ』

俺は、フェイトたちの前に立ち、精神を集中する

そして、

『—I am the born of my sword（体は剣で出来ている）…』

目も前の恐怖を、遮る盾となる！

あの子のように、全力を尽くそう！

ロー・アイアス
『熾天覆う七つの円環！！！！』

あの子の盾には劣るが、私の丘にある最強の盾を張ろう！！
私が、アイアスを張ると同時に、またジュエルシードが暴走を起こす
だが、そんな魔力暴走など、宝具であるアイアスを突破する事など
できん！！！！

結果は、見なくても解りきっていた

私は、魔力が収まると同時に、アイアスの投影を破棄し、新たな宝
具を投影する

トレース・オン
『投影開始！！』

新たに投影するのは、あらゆる魔術を断つ槍

ゲイ・ジャルグ
『破魔の紅薔薇！！！！』

ゲイ・ジャルグ
私は、破魔の紅薔薇を操り、ジュエルシードを上空に飛ばす

これに触れた間は、魔力を流す事はできない……つまり、これで触れ
れば、ジュエルシードを封じる事ができる

上空に飛ばされ、落ちてきたジュエルシードを掴み、フェイトの元
へ戻る

『待てっ！ジュエルシードを返せ！』

『フっ、返せだど？残念だが、それは出来ないな。何、危険視しな
くてもいい。これは、私が責任を持って預かっておく。行くぞ、フ
ェイト。アルフ。』

『え、あ、う、うん！』

『あいよー！』

あのフェレットもどきが、叫んでいるが無視をする

……どうやら、セイバーのマスターは、アヴァロン全て遠き理想郷の投影により
気絶しているようだな
私たちは、そのまま拠点であるマンションに向かった

ふう、あそこまで自身に嫌気が出たのは、過去の自分を殺そうとした
とき以来だったな…

『アーチャー、大丈夫？』

「ああ、大丈夫だよ。アリシア、少し自身に苛立ちを持ってただけ
だ」

まったく、アリシアにまで心配されるとはな…
フェイトとアルフにも、心配をかけてし…今夜は、ご馳走でも振
舞ってやるか

* * * * *
* * * * *

あれから、俺（とアリシア）はスーパーで食材を買い、喫茶翠
屋という場所でシュークリームを買って帰った

帰ってみると、既にフェイトとアルフは起きていたようだ

まずは、昨日のことを謝ったが、フェイトもアルフもそれほど気にしていなかったようだ

ただ、さすがにアイアスなどのことは聞かれたが…

それから、フェイトと共に食事を作り、サボってるアルフを無理やり働かせていた

そして、今はさっき買った翠屋のシュークリームを持って、マンシヨンの屋上にいる

「それで、今回は随分早いが…もうジュエルシードの探索に行くのか？」

「うっん、違うよ。今日は、これから母さんに会いに行くんだ」

…フェイトの母親が

アリシアから、聞いたが…あのことは黙っておいたほうがいいな

（『アーチャー…』

（『どうした、アルフ？』

（『フェイトにもしもの事があつたら、頼んでいいかい？』

（『ああ、もちろんだ』

やはり、虐待を受けているのか？

アリシアからは、フェイトとアリシアについて、プレシアがフェイトをどう思っているか？、くらいしか聞かされていないからな…

プレシア・テストロッサが、フェイトを嫌っているしか知らないからな…

「？アーチャー、アルフ、どうしたの？さっきから黙ってて？」

「いや、なんでもないぞ、フェイト。さ、早く行こう」

「うん。バルディッシュ、ごめんね？また、負担をかけちゃって…」

『構いませんよ、マスター』

「ありがとうございます。次元転移、次元座標 8 7 6 C 4 4 1 9 3 3

1 2 E 6 9 9 3 5 8 3 A 1 4 1 3 7 7 9 F 3 1 2 5。

開け、誘いの扉。時の庭園の主、プレシア・テストロッサのもとへ

！」

閃光が走り、思わず目を瞑る…そして

「くっ…」

「ど、どうしたの！アーチャー！！？」

「す、すまん…どうやら、少し酔ったみたいだ…」

そう、酔ってしまった…

まさか、こんな事になるとはな…

「ああ、そりゃ次元酔いだね？慣れていと、時々酔ってまうんだよ」

「それじゃあ、アーチャーはここで休んで。私とアルフで行ってくるから」

「す、すまん…」

（『すまん、アルフ…何かあったら、念話してくれ』

（『仕方ないさ、しっかり休んでなよ？』

（『助かるよ、アルフ』

俺は、フェイトとアルフが遠ざかるのを見ている事しかできなかった

『わぁ、ここに戻ってくるのも久しぶりだ〜！！』

「……な、なんているんだ、アリシア？」

『むう、私だつてここの家族だよ、だ!』

どうやら、俺たちの次元転移に付いてきたみたいだな…いや、ここは”憑いてきた”のほうが合ってるか

『何か、変なこと考えてない?』

「い、いや!別に何も考えてないさ!」

おかしい…

一瞬だが、かなり懐かしい赤い悪魔を思い出したぞ?

(『アーチャー!お願いだよ、フェイトを…フェイトを助けておくれ!』)

「アルフ!」?

急に來た、アルフからの念話を受け取り、俺は走り出す
いつたい、何が起こつたんだ!!!?

『アーチャー!こつちだよ!』

「助かる!」

アリシアに先導されながら、俺は時の庭園を駆ける

そして、一つの大きな門に着くと、そこにアルフが泣き崩れていた

「アルフ!」

「アーチャー!フェイトが、フェイトがああ鬼婆に!」

鬼婆というのが、誰かは知らない。だが、フェイトを傷付けるものは許さん！

「I am the born of my sword（体は剣で出来ている）…偽・螺旋剣！！」
カラド・ボルグ

俺は、瞬時に黒く塗りつぶされた弓と螺旋状の矢を投影し、放つ
それにより、目の前の巨大な門を破壊する

「何事！！？」

「アー…チャー？」

破壊された門から覗く光景は、最悪な物だった
バインドで両腕を縛られ、つるされたフェイトには無数の鞭で撃たれた傷がある

「…貴様が、プレシア・テストロツサだな？」

「…ええ、そうよ。私が、この時の庭園の主、プレシア・テストロツサ…あなたは？」

「自己紹介が遅れたな…私のことは、アーチャーと呼びたまえ。さて、我がマスターであるフェイトを返してもらおうか？」

瞬時に、干将・莫耶を投影し投擲する

投擲させた干将・莫耶は、宙を舞いバインドを切り裂いた
今まで、自身を支えていたものが無くなり、崩れ落ちるフェイトを
直ぐにアルフが支える

「アルフ、フェイトを連れてこの場を離れる」

「…アーチャーは、どうするんだい？」

「なに、俺にはやることがあるんだ」

「…無理するんじゃ、無いよ」

「善処しよう」「、そう呟くと同時に、アルフは走り去っていく
…さて

「先に言っておく、フェイトとアリシアを同一視するのは止める」
「ッ！何故あなたが、アリシアのことを！！」

俺の言葉に、怒りを持ったのか、いきなし『フォトンランサー』で
攻撃してくる

「フッ！」

だが、俺はバインドを切り裂き、戻ってきた干将・莫耶を手にし、
切り裂く

「くっ、あんな人形を！私のアリシアと同一視するですって！？ふ
ざけないで！！！」

「…なに、こちらはそちらの情報を得ていてね。知っているぞ？事
故で死んだ、娘であるアリシア・テスタロッサを生き返らせるため
に、クローン技術で生まれたのがフェイトだと…先に言っておく、
死んだ者は生き返れん！不可能な理想に縋りつくな！！！」

死者の蘇生なんて、聖杯でも無理なことだ！

俺は、射撃魔法は干将・莫耶で切り裂き、砲撃魔法はかわしながら
叫ぶ

「五月蠅い！あなたなんか、何がわかるというの！！」

「そんな物知るかつ！今を認めず、過去に囚われた貴様の気持ちなど！！」

プレシアは、昔の俺に似ているが、決定的に違う

過去に囚われているのは確かだ…だが、過去を取り戻そうとするプレシアに対し、過去の自分を殺そうとした俺…

やれやれ、この親子は、親子揃って俺に似ているとはな…

「行くぞ！プレシア・テ」駄目~~~~~！！！！！！」フェイト！！」

しまった、今の話を聞かれたか？

「アーチャー、お願い！母さんと、戦わないで！！！」

「むっ！」

くっ、令呪を使われたか…

内容は、プレシア・テストロッサとの戦闘を行わないことか…仕方ない

「プレシア・テストロッサ、これで失礼させてもらおう」

「待ちなさい！！」

プレシアの魔法を避けつつ、俺はフェイトを抱えその場を離れる。

フェイトのようすから、どうやら聞かれて無いようだな…助かった途中で、アルフとも合流し、俺たちは時の庭園から脱出した

s i d e o u t

s i d e プレシア

「待ちなさい!!」

あの男は、私の静止を無視してそのまま走り去ってしまふ。
魔力反応は……消えたわ。もう地球に行ったのね……

「あの男……いったい、何処でアリシアとフェイトの事を知ったのよ……それにどうして、フェイトの事を知りながら一緒にいられるの?」

最近、いつも考えてしまふ、人形フェイトのことを。

フェイトも私の娘ではないかと……でも、否定しなければいけない。

私は、フェイトの母親じゃない……私は、アリシアの母親なのだから……

私は、アリシアの母親……アリシアは私の娘……フェイトはアリシアの代わりとして造った人形……

でも、何故か心の中で引っかかってしまふ……まるで、心の奥のどこかがその関係を拒むように……

「ッ!ゴホッ、ゴホッ……」

どうやら、私の命ももう永くもちそうにないわね……

あの人形に、もっと急がせないと……

でも、あの男がジャマになるわね…傭兵でも雇った方がいいわね…

s i d e
o u t

第十四話「プレシア・テストロッサ」（後書き）

今回は、アーチャーとプレシアの初邂逅でした

今回の件で、プレシアに敵視されたアーチャー…フェイトを守りきれるのか！？

なんか、アーチャーが主人公っぽくなってきたな…

そして、感想にあったのですがプレシアさんの扱いが雑という意見をもらい、読み直しましたが確かに雑でしたので、プレシアさんsideを追加しました

最後に、感想をくれた

グラムサイト2様、tokki-兄様、雨季様

ありがとうございます

第十五話「現れる第三勢力」(前書き)

今回は、いよいよKY…ゲフンゲフン…クロノの登場です！
後、前回から念話による会話を

（『

と、しました

第十五話「現れる第三勢力」

第十五話「現れる第三勢力」

s i d e
なのは

目が覚めると、私の部屋で寝ていました

セイバーさんとユーノ君から聞くと、私が”全て遠き理想郷”を投影し、真名解放が出来たけど、そのまま気絶しちゃったみたいです私が、気絶している間に、アーチャーさんが色々な宝具を投影して、ジュエルシールドの暴走を止めたみたいです

その際に、アーチャーさんが言っていたのはロー・アイアスとゲイ・ジャルグだ、そうです

ロー・アイアス
熾天覆う七つの円環は、士郎お兄ちゃんが良く使ってた防御用の宝具の筈です

どうして…アーチャー、ロー・アイアス熾天覆う七つの円環を使えるの？

ロー・アイアス
熾天覆う七つの円環は、ギリシャの英雄のアイアスの盾です

これだけ見れば、アーチャーさんの真名はアイアスさんですけど…
アーチャーさんは他にも干将・莫耶も使えます。干将・莫耶は中国で作られた双剣ですから、一致しません…謎は深まるばかりです

* * * * *
* * * * *

「ごめんね、レイジングハート…」

『気にしないでください、マスター』

私の目の前には、ボロボロになってるレイジングハート（待機形態）があります

…私が、もつとしっかりしてれば、レイジングハートはこんなことにならなかったのに……

「大丈夫ですよ、ナノハ」

「セイバーさんの言う通りだよ、なのは。レイジングハートなら、今日の夕方頃には直ってるよ！」

「うん…ありがとう、セイバーさん。ユーノ君。」

そうだよね、落ち込んでたら何ともならないよね

よし！こんな失敗が起きないように、頑張んなきゃ！

それから、私は学校に行き、放課後にセイバーさんとユーノ君と合流しました

その頃には、レイジングハートはもう直ってて安心したの！

そしたら、近くの高鳴臨海公園でジュエルシードの反応がしました
私たちは、急いで高鳴臨海公園へと向かいました

s i d e o u t

side アーチャー

「ったく…めんどくさいね、コイツ…生意気にバリアなんて張ってるよ!」

アルフが叫ぶ

今回は、ジュエルシードは気に取り付いたらしい姿をしている

…やれやれ、商店街を歩いていた時に久しく見たドラゴン。エストの人面樹を思い出すな

けど、こっちには顔が無い分不気味じゃない、か

「フェイトちゃん!アルフさん!アーチャーさん!」

「くっ、向こう側ももう来ちまったのかい!!」

セイバーたちも来たようだな…

「アーチャー、ここは一時休戦しませんか?」

「ああ、俺もそれを提案したかった所だ」

どうやら、セイバーは俺と同じ考えのようだな…

何故だか知らないが、嬉しく思える

「ちょ!アーチャー!?!正気かい!?!」

「ああ、正気だぞ、アルフよ。ここは、共闘したほうが、確実に封印できるからな。どうだ、フェイト?」

「私は…アーチャーの意見がいいと思うな」

「フェイト!?!?」

「セイバー、こちらは問題ないぞ」

セイバーもどうやら、向こう側で話し合いをしているようだ、マスターである高町　なのはは、どうやら直ぐに賛成してくれたようだ

「ええ、こちら構いません。終わったら、ジュエルシードを賭けて決闘などどうでしょう？もちろん、ジュエルシードが暴走しないようにしてからで」

「クッ、ああ。それが最適だな」

俺は、セイバーにそう応えながら弓と矢を投影する

封印するには、まずはあのバリアを突破しなくてはいけないからな

「アーチャー、私があバリアを切り裂きますので援護をお願いします」

「解っているさ。フェイト！高町　なのは！セイバーが、バリアを切り裂いたら一斉に封印しろ！アルフとユーノは、二人に危害が起きないようにカバーを頼む！」

「うん！」「はあ…あいよ！」「確かにそれが最適ですね…はい！」

「それでは、いきます！」

確認が終えたところで、セイバーが人面樹もどきに突っ込んでいく人面樹もどきは、セイバーの接近を防ぐために、根っこで襲い掛かるが、無駄だ！

「はあっ！」

根っこは、俺が矢で射る

矢は、魔術的作用は施していないので、威力は低いが、何発も射れば根っこごと破壊できる！

「さすが、アーチャーですね…はあああ!!」

セイバーは、自身の持つ聖剣で、人面樹もどきのバリアを切り裂く
だが、その際にどうやら人面樹もどきごと切ったようだがな
セイバーは、直ぐに後退し

「ナノハ！フェイト！今です!!」

二人へと、指示を仰ぐ

「うん！行くよ、レイジングハート！」 「は、はい！バルディッ
シュ！」

『はい！ディバインバスター!!』 「解りました。サンダー
スマッシュアー」

二人の放つ、封印（という名の砲撃魔法）が、人面樹もどきへと放
たれる

…恐ろしい光景だな。たった9歳の少女が、之ほどの威力を出せて、
なおかつその一撃を浴びるとは……何気に、二人の息は合っている
し…二人なら、仲の良い友達になっただんじゃないか？

「アーチャー、お願いします」

「ああ。投影開始…トレス・オン…これで、大丈夫だろう。念のため、アルフと
フレットもどきもこちらに来てくれ」

「あいよ」

「は、はい……って、僕はユーノですよ!?さっき、ちゃんと僕の名前を呼んでくれたじゃないですか!!」

「なに、ノリだ。気にするな」

俺は、マグダラの聖骸布を投影し、ジュエルシールドを包む。これで、魔力を浴びて、暴走することはないだろう
二人とも、こちらに来てくれて…これでよし！

「それじゃ、行くよ、フェイトちゃん！」
「…行きます」

二人の決闘が始まる

フェイトも高町　なのはも、いきなり接近戦を繰り広げようとする
…ムッ、なんだいきなり魔力反応が

「ストップだ！ここでの戦闘は危険だ」

いきなり、二人の前に一人の少年が現れる
見た目、フェイト達と同年代か？

「時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ！詳しい状況を聞かせてもらおう」

「時空管理局だって！くっそ、引くよ！フェイト！！」
「う、うん」

（ほお、この少年が時空管理局員か…
次元世界の正義の味方…的な話を聞いたが、強大な組織だ。恐らく、裏では犯罪行為をしている輩も否めないだろう）

アルフがクロノとか言う少年に威嚇射撃を放ったな
フェイトは、そのまま聖骸布で包んであるジュエルシールドのもとへ向かう

クロノは、魔力弾を放つな…ってなに！？

（なっ！この斜線だと、フェイトに直撃だぞ！！戦闘を止めるのに、

警告も威嚇射撃もせず、直撃を狙う阿呆がいるのか！？)

俺は、干将・莫耶で直ぐにフェイトに向かってくる魔力弾を切り払う

「あ、アーチャー！？」

「行け、フェイト！俺が時間を稼ぐ！なに、単独行動は弓兵の得意分野だ。必ず戻る！」

「で、でも！」「いいから行け！」…解った、かならず帰ってきてね！」

「もちろんだ…ああ、一つ聞き忘れていた」

「えっ、何？」

「時間を稼ぐが…別に、アレを倒してしまっても構わないだろ？」

俺のそんな発言に、フェイトはきょとんとしたが、直ぐに笑って答えてくれる

「うん、お願いね！」

「ああ、任せておけ！」

俺は、こちらに怒りを向ける馬鹿に向き直った

だが、この時まだ俺は気づいてなかった

無防備なフェイトを攻撃し、海鳴市に不法侵入したあげく、訳も分からぬ事を言っただけで場を支配する少年に怒りを見せる少女がいる事を…

第十五話「現れる第三勢力」(後書き)

なのは視点よりも、アーチャー視点のほづが書きやすい…

最後に感想をくれた

グラムサイト2様、tokki-兄様

ありがとうございます！

第16話「管理局との戦い」（前書き）

すみませんでしたあああ！

こんなに投稿が遅くなっていました。どうしても、書いているとクロノをなのはが完全にフルボツコになってしまい、なのはとフエイトのバランスは合いませんでした。そのせいで、投稿が遅くなっていました

第16話「管理局との戦い」

s i d e なのは

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろ？」

アーチャーさんのその言葉は、まるで聖杯戦争のバーサーカーのと

きに行った台詞の同じでした。

でも、今の私はそんなこと関係ありません…

ユーノ君からは、時空管理局はあらゆる次元世界を護るための組織…そんな組織が、無防備なフェイトちゃんに威嚇射撃も無く、そのまま攻撃するなんて許せない！
少し、おしおきが必要なの…

「アーチャーさん…少し、変わってくれませんか？」

「あ、ああ…（な…何故だ、今のあの少女からかの赤い悪魔を幻視させられるぞ！？）」

アーチャーさんの前よりも前に立ちふさがり、時空管理局の人の前に立ちます。

「君！これが、公務執行妨害だつてわかっているのか！？」

「うっん、私は正規の魔導師じゃないから解りません。でも…」

私は、あくまでユーノ君のお手伝いとして魔導師になっただけ…管理局の知識なんてありません。
でも、ユーノ君から聞いた情報^{カード}があります！

「ここは、時空管理世界外なんですよね？だったら、ここではあなたに権限はありませんよ？」

「ぐっ…だ、だが、ロストログアを放つて置くわけには行かない！だからこそ、ボクたち時空管理局の出番なんだ！！」

「そう…ですか。でも、大丈夫ですよ？海鳴市は、私たち魔術師の管轄ですから」

「なっ！？魔術師だと！！この世界には、魔法文化は無いはずだ！」

「確かにこの世界には『魔法』はありませんよ？」

「くっ…詳しく聞かせてもらおうか！！」

舌戦では、私の勝ちです。

こうみえて、お父さんと士郎お兄ちゃんから色々と教わってたんだから！

それに、私には対男の人用の最強の武装があるんだから！

トレース・オン
「投影開始！」

「「なっ！？」」

私が投影した武装を見て、時空管理局の人とアーチャーさんが驚きます。まあ、それもその筈ですね。だって、私が投影したのは、魔力反応の無いただの布に見えるから。

「魔力のこもっていないただの布だと…馬鹿にしてるのか！」

この布は、マグダラの聖骸布…

普段はただの布でしかないけど、キーワードと一緒にこの布を振ることで、男の人を拘束する布。

確か、士郎お兄ちゃんは、カレンさんっていう人に何度も使われたって聞いたな。

つと、無駄な思考はここまでにしないと。

時空管理局に人も、もう臨戦態勢をとってるし。

「行きます！援護してね、レイジングハート！」

『イエス・マスター。直射型魔力弾が4発、左右から来ます』
「うん！」

レイジングハートの言うとおり、左右から2発ずつ魔力弾が飛んできます。

解析の魔術を使わなくてもわかるくらいの圧縮された魔力弾を前進

しながら、干将を投影して必要最低限の魔力弾だけを切り裂く。

「魔力弾を物理的に切り裂くだと…」

「確かに、私やフェイトちゃんより速いし、こめられてる魔力量も大きいですけど…この位なら、士郎お兄ちゃんの特訓のほうがキツイです！」

「くっ…なら、手加減はもうしないぞ！」

放たれる魔力弾のスピードがさっきよりも速くなっています。

…やっぱり、さっきまでは手加減だったんですね。

くっ…このままじゃ、近づけない！

捌ききれず、魔力弾が一気に数発と私に当たりそうになります。ま、まずい！

だけど、その魔力弾は私に当たることは無かった。何故なら、その魔力弾は数本の弓矢に打ち抜かれたから。

「アーチャーさん!!！」

「私が援護する！さつさとそいつを決めてしまえ!!！」

かなり(?)いい笑顔で、私を助けてくれたアーチャーさん…なんだか、この能力を知っててあんな顔してそうなの。でも、お陰で有効範囲内に入れた！

ノリ・メ・タンゲレ
「我に触れぬ！」

「な、なんだこれは!?!」

管理局の人をマグダラの聖骸布が包み込みます。

これで、マグダラの聖骸布の真の力が発揮します！

「なっ!?!なぜバリア・ジャケットが…」

「教えるとおもいますか？…少し、OSIOKIなの」

私は、レイジング・ハートを構えていい笑顔(?)で話しかけます。

「いくよ、レイジング・ハート！」

『イエス・マスター』

「ディバイーン・バスターー……！！！！！！」
「ぎやあああああああつ！！！！！！」

Side out

Side
アーチャー

零距离からの砲撃魔法…しかも、聖骸布で相手の動き・魔法を封じるとは…酷いな。まるで、悪魔のようだ…

「アーチャー……さすがにあらはやり過ぎな気がしますね……」

「ああ…私もフエイトに倒してもいいかと聞いたが、ここまでする気はなかった…さて、私はこれで逃げさせてもらうよ」

「ええ。また合間見えましょう」

「ああ。あの子には、私の分までやってくれてありがとうと言って
おいてくれ」

「はい。必ず」

俺は、セイバーにそう言い残してその場を後にした。もちろん、追跡などをさせないように霊体化を行なった。

S i d e o u t

S i d e なのは

ふう、スッキリしたの。

私は、ボロボロになった時空管理局の引きずってます。

『ちょ、ちよつといいかしら?』

「ふえ?」

いきなり、私の目の前にモニターが現れます。

え、え、ええ?!これって、あきらかに魔法じゃなくて科学だよね!!!?

『私はその子の上司のリンディ・ハラウンって言っの。ちよつとお話したいことがあるから、時空船に来てくれるかしら?』

「時空船…ですか?」

ユーノ君のほうを向いてみると、ユーノ君は頷いています。そっか、この申し出は受けたほうが良いんだね。

「はい。解りました」

うーん…これが、吉と出るのか凶と出るのかどっちなのかな？

Side our

時の庭園…プレシア・テストロッサの拠点であるこの場所に、今はプレシア・テストロッサともう一人の少女がいた。
その少女は、フェイトと同じくらいの年頃の少女だった。

「あんたが、今回の依頼主か？」

「ええ、そうよ。私が、貴方に依頼をしたプレシア・テストロッサよ」

少女の口調は女の子らしくなく、まるで男の子のような口調だった。金色の髪をなびかせて話す少女は、黒い帽子にワンピースを着た、まるで童話に出てくる魔法使いのような格好だった。

「それで、依頼内容はなんなんだ？」

「ええ。私はこれから、数日後にある実験を行なうの。けど、その実験を行なう間に私の実験を邪魔する者が出てくるはずよ。貴方にはその実験を行なっている間、ガードマンのような仕事をして欲しいのよ」

「へへっ。なかなか面白そうな依頼じゃないか。いいぜ、やってやるぜ！」

少女の笑みは、まるで面白いものを見つけた少年のように思える。

「そうそう。その際には、この子も通さないようにお願いするわ」
映し出されるのは、一枚の画像。そこにはフェイトの姿が映っていた。

「？なんでなんだ」

「この子の名前はフェイト・テストロッサ。私の……娘よ。実験中は、危険が伴うからこの子も通してはいけないのよ」

プレシアが、フェイトのことを娘と呼ぶ際少し顔をしかめていた。だが、それも一瞬で、少女にはそれを知られなかった。

「へえ」。なかなか親バカなんだな」

「親バ……別にどうでもいいわ、そんなこと。でも、本当に貴方は噂の魔導師なのかしら？今の貴方を見ていると、不安に思えるわ」

「だ……か……ら……！あたしは、魔導師じゃないって。でも、まかしときな！あたし、アンナ・K・遠坂の依頼達成率は100%なんだぜ？そんじゃ、依頼日に会おうぜ！あんたの娘さんにもよろしくな！」

そう言って去って行くアンナ。一人になったプレシアは、ある考え事をしていた。

「娘……ね……私の娘は、アリシア一人だけよ」

そう呟いて、アリシア・テストロッサとの過去を思い出している。だが……

一つだけ思い出せないものがあつた。

『いつも一人にさせてごめんね、アリシア。その代わりに、一つだ

けなんでも好きなことを言っているのよ』

『本当！？それじゃあね私、□□□が欲しいの！』

『えっ、□□□！？え、ええ。なんとかして見せるわ』

『うん！約束だよ！』

（えっ…何故？何故、アリシアとの約束を思い出せないの！！？）

プレシアは、何度も何度も自身の記憶を辿る。たった一つ、娘であるアリシアとの約束を思い出すために。

第17話「管理局との交渉」(前書き)

最近、テスト週間に入ってるのに投稿してる俺がいる…

第17話「管理局との交渉」

『それじゃあ、今から次元船に転送するから動かないでもらえるかしら？』

「はい！」 「はい。了解しました」

私たちは、戦闘があつた臨海公園で次元船への転送を待っています。ユーノ君はもう人間形態に戻っていて、セイバーさんも鎧を取った

ドレスのような服装に戻っています。

……ちなみに、さつきから魔力ダメージで気絶してる管理局さんは、未だに聖骸布で簀巻き状態になっています。

つと、考えていると急に辺りが光に包まれてきました。あまりの眩しさに、目を瞑ってしまいます。そして、次に目を開いた先は……ハイテクなSFの宇宙船の中みたいな所でした……えっ？これって魔法関係なの？SFのような気が……そう考えると、私たちの近くへと、緑色の髪をした女の人がやってきました。

「初めまして、私はここの艦長をやっているリンディ・ハラオウンって言うわ」

「あ、初めまして。私は、ユーノ君のお手伝いをさせてもらってる高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「私は、セイバーと申します」

「ふふ。なのはさんとユーノ君にセイバーさんね。それじゃあ、こちでお話を聞かせてください。エイミィ、クロノをお願いね？」

「はいはい！私は、エイミィ・リミッタだよ。よろしくね？」

エイミィさんは、簀巻き状態のクロノ君を引きずって何処かへ言ってしまいました……後で、聖骸布を投影破棄しとかなきゃ……

「それじゃあ、ついて来てもらえるかしら？」

「はい、わかりました。では、行きましょう。ナノハ、ユーノ」

「うん、セイバーさん」「はい、セイバーさん」

リンディさんを先頭に、セイバーさん、私、ユーノ君の順に並んでついて行きます。それから、しばらく歩いた所にある部屋に着きました。その部屋の中に入ると……なぜか、SFな船の中に和室がありました……ししおとし付きで。

「さて、それじゃあ今回の件について聞かせてもらえないかしら？」
「あ、はい。それじゃあ、ここからは僕が」

「ここぞとばかりに、ユーノ君が話し始めます。…そういえば、ユーノ君さつきからずっと黙ってたの…」

「……だから、僕がジュエルシードを集めてたんです」
「立派なのね」

「…だ、だが…無謀すぎる」

ユーノ君があらかた説明し終わると、急に部屋の自動扉(?)が開いて、さつき戦ってたクロノ君がやってきました。まだ、私の零距离ディバインバスターのダメージが抜けてないのか、エイミィさんに肩を借りてました。

「あら、クロノ。もう目が覚めたの？」

「はい、かあさ…艦長。まだフラフラとしますが、大丈夫です」

「すみません、艦長。クロノ君つてば、言うことを聞いてくれなくて…」

「まあ、それはさて置き。これから、この件に関しては私たちが全権を持ちま…」

「ヤなの…」

「や、って…そんな問題じゃないんだぞ!？」

リンディさんが、今回の件を全権を持ちます、と言い切る前に私が否定します。

クロノ君は、なんか怒ってるけど私も反論させてもらっよ。

「少なくとも、ジュエルシードが落ちている範囲内に海鳴市が入っ

ている以上、海鳴市のオーナー代行である私が、ジュエルシード探索の責任を放棄する訳にはいきません」

「海鳴市のオーナー…ちょっとその辺のことを聞かせてもらえないかしら？」

「ならば、その辺のことは私が説明をします。魔術師は、各地で自身の領土を取り、そこを縄張りに行動することがあります。その縄張りで、魔術的行為が起きた場合の対処をする主のことをオーナーと呼びます」

リンディさんから、オーナーについて質問されたけれど、セイバーさんが変わりに説明してくれました。

「それじゃあ、次に魔術師について教えてもらえないかしら？」

「そうだ！この世界は、魔法すら知らないはずだ！なのに、何故そんなものがあるんだ！」

「そう決めつけるのはよくないと思うの…私は、お兄ちゃんに魔術を教わっただけです。お兄ちゃんは、恐らく魔術使いは俺一人だろう、って言うてましたので他の魔術師がいるかは解りません」

「なるほどね…あなたのお兄さんに会わせて貰えないかしら？」

その言葉を聞いて、少し私の顔に影が浮かびます…士郎お兄ちゃんは、もう亡くなって2年経ったんだよね…

「すみませんですが、ナノハの師であるシロウは、既に亡くなっていますので会わせることが出来ません」

「そう…それは、そんなこと聞いてしまつてごめんなさいね…」

「いえ…私は、もう大丈夫です」

まだ影が残りながらも、少しだけ微笑みます。士郎お兄ちゃんは死んじゃったけど、私が魔術を使えていることが士郎お兄ちゃんが生

きていたことの証になるから。

「さて、話を戻しましょう？なのはさんは、オーナー代行としてジュエルシードは放つては置けない、でも私たちはジュエルシードを捕獲する義務があるの。どうしようかしらね？」

「ならば、ここは共闘をするのでしょうか？これならば、お互いに譲ることは無く出来ると思います」

セイバーさんが、ここぞとばかりに私にとってもリンディさんたちにとっても利益のある案だと思います。

「そうね…うん。その案は、私たちはいいわよ、セイバーさん」

「かあさ…艦長！？」

「ナノハ、ユーノ、貴方たちはどうですか？」

「私はOKなの！」「僕も構いません」

「それじゃ、そうしましょ！なのはさんとセイバーさん、ユーノ君は一度お家に帰って、お家の方から許可をもらってきてね？共闘する際は、アースラ…ここにいてもらいたいのよ」

「うん。解ったの！」

私たちは、さっきいた公園に転送してもらって一度お家に帰ります。そして、お父さんとお母さんからしばらくジュエルシードを探すために、時空管理局という次元世界を管理する団体の所に行きたい、と言ったら直ぐに許可してくれました。それから、レイジングハートを使ってリンディさんに連絡を入れると明日の朝、また同じ臨海公園に来て欲しいとありました。

明日から、もっと忙しくなりそうなの。

第18話「主を救うための力」(前書き)

なんとか完成しました。

第18話「主を救うための力」

時空管理局との共闘が決まり、数日経ちました。管理局はすごい。今まで、中々見つからなかったジュエルシードが、今までよりも早く見つけることが出来てます。そして、今も。

「チェーンバインド」！セイバーさん、お願いします！」

「ええ。はあああ！よし、今ですナノハ！」

「うん、解ったの。行くよ、レイジングハート。」ソード・バレル・

フルオープン”！！」

鳥型のジュエルシードを、ユーノ君のバインドが捕まえて、セイバーさんの剣が羽を切り裂き、飛べなくなった所を私の新魔法がジュエルシードを圧倒しました。

「これで、封印完了だね？」

『はいはい！それじゃあ、転送するよー』

「はい」「解りました」

封印し終えて、私たちはアースラに転送されました。

「にしても、本当に君は規格外だよな……」

ジュエルシードの封印をし終えてから、私たちは食堂で軽く摘まんでいます。…セイバーさんの前には、既に何杯もおかわりされたお皿が詰まれています…そんな中、クロノ君がこっちに来ました。

「そうかな？」

「そうだ！まったく…なんで僕の”ステインガー・ブレイド”を見ただけで真似できるんだ……」

そう、さっき使った魔法は、クロノ君の魔法を応用したものです。何本もの魔力刃を作り出し、それを相手に向けて放つ魔法。それが、クロノ君の魔法です。私の場合、いくつもの刀剣類に似た魔力刃を相手に飛ばす魔法ですクロノ君と違って、私の魔法は士郎お兄ちゃ

ソード・バレル・フルオープン
んの全投影一斉掃射を真似してる所かな？

「そういえば、なのはとあの魔導師の子が持つてる子のジュエルシードを合わせると、後何個なんだろうね？」

「そうだな、少し待っているよ、フェレットもどき」「フェレットもどき言うな！」「……………ああ、ありがとう、エイミィ。後、？個くらいだそうだ」

どうやら、クロノ君がエイミィさんに念話で連絡して見たそうです。
…後、？個くらいかあ…

「これだけ探しても出ないとは…最悪、海鳴に無い可能性もありますね」

「だが、まだ探してない所もある」

「たとえば、何処なの？」

「海岸部分だよ」

『エマージェンシー、エマージェンシー。全職員はブリッジに集合してください』

いきなりのブザーに私とユーノ君は、思わず驚いてしまいます。
もしかして、ジュエルシードが出たの！？私たちは、急いでブリッジへ走っていきました。ブリッジの立体映像には、竜巻と戦うフェイトちゃんたちがいました。

「まったく…無茶をする子ね」

「無謀ですね。あれは、魔導師一人が対処できるレベルではありませんせん」

「あの！私たちを転送してください！」

「その必要は無い。放って置けば、向こうが勝手に自滅してくれる。それに、その方がこちらとしても都合がいい」

「そ、そんな…どうにかならないんですか…」

「ユーノ君」

「なのは…」

私は、無言で顔を横に振ります。少なくとも、クロノ君の考えは組織のやり方としてあっている。クロノ君たちは、組織に人間だからどうしても誰かを切り捨てる考えを持たなければいけないの…そう、『組織の人間』は。組織に属してない、私は何も出来ない無力さにただ握りこぶしに力を入れる事しか出来ません…それに、ユーノ君は気付いてくれてます。

「確かに、組織としての考えとしてはあっています。ですが、私とナノハ、ユーノを転送してもらえませんか？」

「セイバーさん！貴方まで…」

「では、反論させてもらいます。確かに、このままならフェイトたちを捕まえることは楽でしょう。ですが、もしフェイトたちが倒されたら結界はどうするんですか？」

「ッ!？」

「術者が倒されれば、結界は破れるでしょう。そうなれば、あの竜巻が民間人に被害を与える可能性もあります。そして、ここから結界を張るのにどれ位かかりますか？少なくとも、ユーノを送っておき、もしものの為に備えて置くのが最善だと私は考えます」

「た、確かに…そうですね」

すごい…さすがはセイバーさん。あのクロノ君をうまく丸め込んでます。……でも、何でリンディさんは何も言わないんだろう？

「それに…」

「それに？」

「あそこには、アーチャーもいますから」

そういつて、不適な笑みを見せるセイバーさん。アーチャーさんは、さつきから何故か姿が見えてません。でも、あの場にアーチャーさんがいれば、きっとこの惨事をおさめれると思います。

「…解りました。それでは、なのはさん、ユーノ君、セイバーさんの3人にはあの子の援護に言ってもらいますけど、いいですか？」
「…「はいっ！」」

私たちは、ブリッジを駆け出しました。

S i d e o u t

「それで、どうだった、クロノ。セイバーさんの考えは？」

「…はい。少なくとも、セイバーさんには僕が考え付かなかった考えを持っていて、見習わなくてはいけないと思いました」

「ふふっ。それは、よかったわ」

「まさか！母さんはそれを僕に教える為にずっと黙ってたんですか！？」

「さあ、どうかしらね？さ、なのはさん達も到着する頃よ」

S i d e o u t

S i d e フェイト

「はぁ…はぁはぁ…」

「大丈夫かい、フェイト？」

「うん…まだ、大丈夫…絶対に、私たちだけでなんとかするんだ」

今、この場にアーチャーはいない…私たちが、そうしたから。アーチャーは、私の使い魔だけど、迷惑はかけたくない。今回だって、最悪時空管理局に捕まる可能性だってあったから。だから、アーチャーには山のほうを探してきてもらうようにした。本当は、ここにあることを知ってたのに。だから、このジュエルシードは私たちだけで何とかするんだ！

S i d e o u t

S i d e なのは

転送された場所は、雲の上でした…

私やユーノ君は平気だけど、セイバーさんは大丈夫かな？

「ナノハ。私の事は気にせず、フェイトを！」

「うん！レイジングハート、セーフトアップ！」

『イエス・マスター！』

私の服は、バリア・ジャケットに変わります。直ぐに、飛行魔法の

”フライヤー・フィン”を発動し、空中に飛びます。ユーノ君も、飛行魔法を使い空を飛んで落ちるのは免れました。セイバーさんは…？

「ふっ！」

セイバーさんは、海に落ちる瞬間に魔力放出で身体能力を強化し、水面を蹴ります。そうすることで、落ちるのを免れ陸地に行くことが出来ました。安心したの。よし、私も！

「フェイトちゃん！私も協力するよ！」

「あんたたちの協力なんかいらな…うわっ！？」

「”チェーンバインド”！大丈夫、アルフ？」

「あんた…」

アルフさんに向かって竜巻が襲い掛かってきたけど、ユーノ君の”チェーンバインド”が竜巻を縛り付けています。これなら、安心だね。

「分け合おう、フェイトちゃん。ジュエルシードを。二人で！」

『ディバイドエナジー』

「っ…これは…」

私のレイジングハートの先端にある宝石の部分から私の魔力の半分が放出され、それがフェイトちゃんのバルディッシュへと入ってきます。これで、フェイトちゃんの魔力も回復できたはず！

「やろっ、一緒に！」

「で、でも…私の魔法じゃ、あの竜巻は…」

「やれやれ、もしかと思いきい霊体化して着いて来たが大変なことにな

っているな、フェイト？」

「あ…アーチャー！？」

いつの間にか、セイバーさんの隣にアーチャーさんがいました。さすがに、霊体化されてたから私でも気付かなかったな。

「セイバー！私と君の宝具でアレを吹き飛ばすぞ！フェイト、アルフ、高町なのは。離れていたまえ！」

「はい！」「わかったよ」

「タイミングは合わせます。アーチャー！」

「ああ… I a m t h e b o r n o f m y s w o r d ）
体は剣でできている）」

「はあああああ…」

アーチャーさんが黒塗りの弓と螺旋状の矢を取り出し、セイバーさんが普段は封王結界で隠された約束された勝利の剣が少しだけ姿を現している。確か…封王結界の風を相手に叩きつける技風王鉄槌ストライク・エアだったかな？

カラド・ボルグ
「偽・螺旋剣！」

ストライク・エア
「風王鉄槌！」

アーチャーさんの宝具が空気を捻じ曲げながら突き進み、その後ろをセイバーさんの風王鉄槌が放たれます。

それにより、アーチャーさんの宝具がジュエルシードでできた竜巻を次々と突き破り、セイバーさんの風王鉄槌が穴の開いた竜巻を通過することで竜巻を次々と蹴散らしていきました。

「…すごい」

「これが…アーチャーの本気…」

その圧倒的な場面に、私もフェイトちゃんも呆然としてしまいます。

「何を呆然としている！今のうちに封印しろ！フェイト！高町なのは！」

「ああ…はい！」

「”デイバーーン・バスターーー”！！」

「打ち抜け、轟雷！”サンダー・スマツシャー”！！」

私とフェイトちゃんの封印魔法が、一気に6つのジュエルシードを封印しました。なんだろう、この気持ち…一緒に封印魔法を使っただけなのに、すごく嬉しい。そっか…私は…私は、フェイトちゃん…と…

「友達に…なりたいんだ…」

私は、フェイトちゃんと友達になりたかったんだ。

第18話「主を救うための力」（後書き）

新魔法”ソード・バレル・フルオープン”について説明します。

クロノのステインガー・ブレイドを見て、士郎が使っていた全投影一斉掃射を基に作った魔法。最大12本ものデイベイン・セイバーもしくは剣刀類の魔力弾を飛ばす直射型魔法。単純だが、使いやすい魔法である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796m/>

正義を受け継ぎし者

2011年10月24日22時58分発行